

韓国における祭祀遺跡・祭祀関連遺物 －沖ノ島祭祀の位置づけのための比較検討資料－

高 慶 秀

平成23年

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅰ 抜刷

韓国における祭祀遺跡・祭祀関連遺物

—沖ノ島祭祀の位置づけのための比較検討資料—

高 慶秀 國學院大学研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター

要旨：沖ノ島の祭祀を理解し、位置づけるための有効な比較検討資料として、韓国における祭祀遺跡・遺構の事例を概観し、祭祀関連遺物について考察を行った。中でも、扶安竹幕洞祭祀遺跡は、沖ノ島と共に古代の海上交通路を考える際に非常に重要な位置を占めているが、加耶・倭系遺物の出土で注目を集めた第三段階の祭祀は、5世紀後半から6世紀前半代の時期を考えることができ、華々しい新羅関連遺物が出土した沖ノ島7号・8号遺跡の時期と一致する。その背景には東アジアをめぐる交易の二元的な構造が窺われるが、九州の勢力は後の磐井の乱に象徴されるような畿内とは別の交易観を持っており、海人集団のネットワークを形成していたであろう。沖ノ島では鉄鋌と雛形鉄器は出土しているが、鉄鋌を少し加工しただけの簡単な工作である有刺儀器は発見されていない。有刺儀器は鉄鋌がもつ象徴的な概念の極大化された形であり、その地域圏の設定は新羅と加耶諸国における鉄生産の実態を直接に反映しているが、このような韓・日の両国における鉄製儀器の偏在的な分布状況からは、その地域性が見受けられ、技術の移動、さらに人の移住に伴う習俗や儀礼などの文化交流・受容の様相を伺い知ることができる。

キーワード：扶安竹幕洞祭祀遺跡、土製模造品、土馬・鉄馬、新羅土偶、有刺儀器

1. はじめに

沖ノ島では対外交渉に関わる様々な遺物が検出されたが、古来、日本は朝鮮半島や中国大陆との交流によってその文化の基礎が築かれ、独自の文化を育んで来た。

東アジア全体にまたがる文化交流・受容の様相を歴史に透視した場合、その文化を受容する姿勢のうえに受容主体の独自の性格が反映されている。そして其々の風土・環境や民族意識を背景とした異なる文化及び思想形態もあるとともに、一方では、共通性をもつものもあることが考えられる。東アジアにおける信仰・祭祀形態に関する共通的な要素に関しては、日・韓両国の考古学者の間でも同様の認識があったようで、弓場紀知は『古代祭祀とシルクロードの終着地・沖の島』の本文の中で、「かつて金元龍先生¹⁾が韓・日で同じような祭祀があったのではないかといわれたのが印象的である。」と回顧している²⁾。このような文化の両極性(二重性)は各民族の文化間に共通性と相異性を生じさ

せるので、一つの文化の形成・発展の過程を考察するには他文化を相互に関連させて考察すべきという当為性がうまれるのである。

祭祀遺跡あるいは、祭祀関係とされる遺跡は、広い意味では人間の宗教行為、あるいは信仰行事、儀式などの行われた跡であり、それらの際に使用され、利用された物、また、それら行為のために準備された品々を祭祀遺物と定義できる。したがって、祭祀遺跡をはじめ、古墳などで出土した遺物も、その時代の祭祀を理解するための貴重な資料になり得るであろう。

今回は、沖ノ島の祭祀を理解し、位置づけるための有効な比較検討資料として、韓国における祭祀遺跡・遺構の事例を概観した後、土馬・鉄馬、新羅土偶として知られている模造品及び装飾土器、そして有刺儀器を中心に考察を行うことにする。そして、その背景となる各時代の土着宗教と祭祀へのアプローチを試みたい。

2. 韓国における祭祀遺跡・遺構の事例

1991年扶安竹幕洞祭祀遺跡の発掘以来、祭祀儀礼に関する研究が本格化し始めたが³⁾、1999年以降、祭祀遺跡の調査が急激に増加し、多様な形態の遺跡・遺構が確認された。現在まで確認された事例としては、居住空間での祭祀、また、水辺及び集落の周囲に巡らされた環壕などの、日常的な生活と関連した空間で行われた祭祀、山岳祭祀、海辺・水辺の祭祀、墳墓祭祀、青銅器を埋納した特殊な祭祀、生産と関連した祭祀の形態などがある。

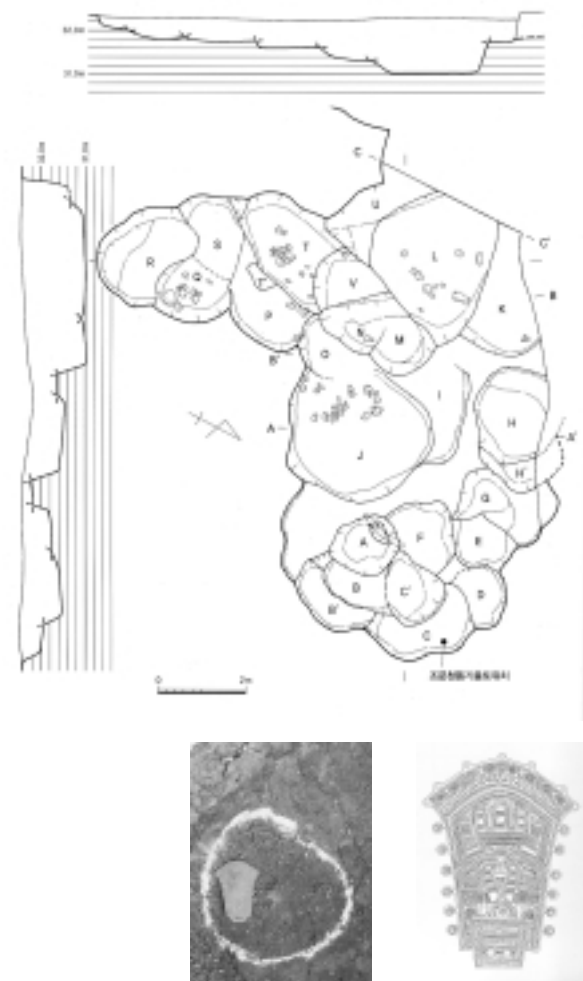
祭祀遺跡・遺構が位置する立地を基準に分類し、考察を行う場合、日常生活の空間の中で行われる祭祀行為と特殊な空間での祭祀、大きく二つに分けることができる。

(1) 生活祭祀

まず、生活祭祀であるが、日常的な生活と関連して行われた祭祀行為である。主に、建物跡の内部や、環壕、建物跡の周辺の水辺などから確認されている。晋州大坪里魚隠1地区⁴⁾の場合、青銅器時代における住居跡内部の礎石の下から地鎮具が検出された。地鎮具⁵⁾の出土は、三国時代から統一新羅時代に至るまでの時期の遺跡に多い。

ところで、日常生活空間と隣接していながら、一定の距離をおいて、祭祀に関係すると思われる竪穴遺構(「儀礼竪穴」)が確認された事例もある⁶⁾。事例として、三国時代の鳥文青銅器の出土で著名な固城東外洞遺跡⁷⁾と、三国時代の山窟玉山里遺跡⁸⁾などが挙げられる。遺構の平面形は菊状を呈する。さらに、遺構の特徴として、遺構が重複して検出される事例が多い。上記したような、祭祀に使用されたと思われる竪穴遺構の存在は、固城東外洞遺跡の発掘が契機となり、世に広く知られることとなった(第1図)。

当遺跡は、丘陵頂上の平坦地から西方に、菊状を呈する竪穴遺構が多数確認され、遺構内部には土器片などの遺物が埋納されていた。さらに、同一の場所で、竪穴遺構が重複する形で検出されたことから、埋納行為が継続的に行われた可能性が大きいと思われ、何よりも行為者にとって、遺構の存在する地点が、特別な



第1図：固城・東外洞遺跡 儀礼竪穴遺構(国立晋州博物館(2003)：『固城東外洞遺跡』)

空間として認識されていたことが窺える。

上記したような祭祀遺構は、他の遺構と混在するのではなく、空間的に分離され、祭祀空間としての空間性を確保する傾向にあることが確認できる。山窟玉山里遺跡からも、祭祀に使用された竪穴遺構が確認されたが、その竪穴遺構は、主に三国時代に造営されたもので、多くの竪穴が重複して造営されており、儀礼行為が頻繁に行われていた様相を示している。

次に、生活と関連する水辺の祭祀遺構として、井戸、坎字、湿地、貯水池などがあるが、青銅器時代の安東芋田里遺跡、論山麻田里遺跡、そして時代が下って、初期鉄器時代の光州新昌洞遺跡、三国時代の漆谷東川洞遺跡、慶山林堂低湿地、大邱・時至地区生活遺跡、扶餘宮南池遺跡などで確認されている。

水辺の祭祀の場合、青銅器時代には村と周囲の小さ

な河川、低湿地、集落の周囲の環濠で祭祀が主に行われ、三国時代に入ってから、井戸と関連した空間で行われた事例が増える。井戸に関する祭祀は、安定的な水の供給という命題のもとに、定住生活が始まる青銅器時代から確認されているが、三国時代に入って急激に増加する。このような現象は農業生産力の増大が、その背景にあったものと思われる。

青銅器時代の井戸遺構としては、論山麻田里遺跡⁹⁾が挙げられるが、出土した鳥形木製品は、井戸が涸れないで、常に清い水の湧出を念願するための、井戸の精化祭儀と関連するものと考えられる。

安東苧田里遺跡¹⁰⁾は、自然水路(あるいは小河川)を部分的に拡大して作った人工池で、青銅器時代の貯水池である。遺物は、孔列土器、赤色研磨土器などの多量の無紋土器と、石器片、団栗、フクベの種などが確認されており、その多くは池の底面からの出土である。また、水路の周辺で土器15点ほどが集中的に破碎された状態で出土したことから、当遺跡が祭祀遺跡であると考えられている。なお、この貯水池は自然河川の一部を加工して造ったもので、後代の貯水池の始原形であると解釈されている。

初期鉄器時代の光州新昌洞遺跡¹¹⁾からは、人面文土鈴、鳥形木製品と豚形土偶、土鈴、銅鐸、銅鐸形土製品、擦音楽器、弦楽器(瑟)、武具形木製品など、祭祀に使用されたと思われる遺物が多量に出土した。

大邱 東川洞聚落遺跡¹²⁾は、漆谷地域の宅地開発による試掘調査で遺跡が確認され、調査が行われた三国時代・新羅の大規模集落遺跡である。掘立柱建物跡と不定形土穴、水路、井戸などの多様な遺構が検出された。遺物としては、草履、縄背負い袋、加工木材、人物及び動物形土製品、土器類などがある。

慶山林堂低湿地¹³⁾は、北側に住居遺跡、東側には史蹟331号である造永洞古墳群、南側には史蹟300号である林堂洞古墳群が位置しており、F地区とG地区には三国時代の木柵、周溝附建物跡、三国時代の墳墓群がある。低湿地は4～7世紀に形成されたと推定されている。低湿地遺跡からよく確認される堰や、堤防などの水利施設築造関連の資料は、調査範囲が限定された関係で確認されなかったが、小型の水路、多数の木柱、人の足跡、溝形遺構などが分布することからみて、低

湿地形成の以前に水田と関連する水利施設が存在していた可能性が高い。低湿地から出土した遺物は、土器類及び土製品、木器類、骨角器、鉄器類、石製品などで、総計約1500点に及ぶ。祭祀遺物としては小型土器、男根形土製品、焼けた18点の卜骨、文様のある石臼、人面像をした土球などが確認できる(第2図)。



第2図：慶山・林堂低湿地出土の祭祀関連遺物(福泉博物館(2006)：『先史・古代の祭祀－豊饒と安寧の祈願』)

大邱・時至地区生活遺跡は、琴湖江と南川、旭水川辺の浅い丘陵と小盆地形態の扇状地に形成されている青銅器時代と三国時代の大規模複合遺跡である。調査の結果、6～7世紀代の三国時代の掘立柱建物跡、道路、溝、石列、竪穴遺構、井戸、池などの多くの遺構が見つかった。遺跡の中央に掘立柱建物と池が位置し、さらに、20～30mの間隔で井戸が配置されている。池があって、井戸が多い点からみて、水を多く必要とする作業が行われた場所であったと判断される。井戸の底と内部の堆積土からは、割れた土器、桃の種の他、木炭などが出土したが、これらの資料からは、飲食物供献など、清い水が安定的に供給されることを祈願する一連の儀礼行為が行われたことが類推される。

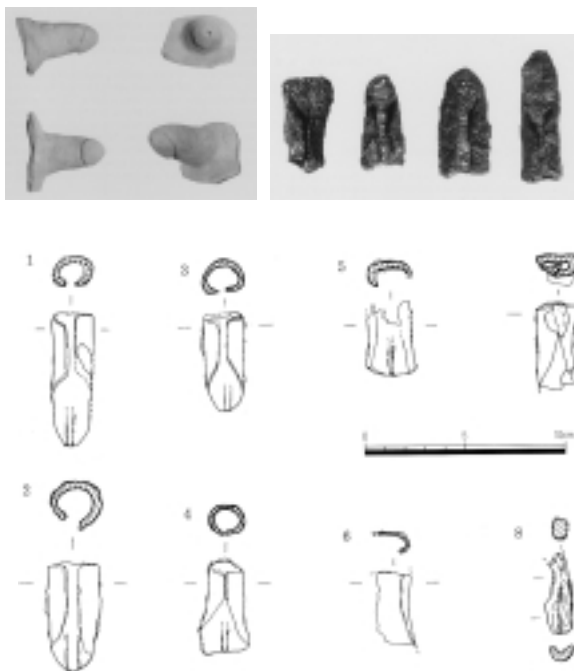
扶餘宮南池遺跡¹⁴⁾は、百濟末期の王宮の南側に作った池遺跡である(『三国史記』武王35年(634))。宮南池内部及び周辺で集水場施設、水路、建物跡などが確認されたが、水路周辺から木製鳥形彫刻品、百濟土器片などの遺物が多量に出土した。木製鳥形彫刻品は天神の媒介者として、人間界と天界と繋げてくれる鳥の宗教的な象徴物である。また、水路の底面に三足土器などの遺物が敷かれていたが、これは水神に対する祭祀を行った痕跡であると把握されている。

(2) 特殊な空間における祭祀

特殊な空間での祭祀儀礼としては、まず、第一に、山岳祭祀が挙げられるが、これはさらに、岩石祭祀、峠祭祀、山頂祭祀に分けられる。金海 舊官洞遺跡¹⁵⁾、多大洞烽火山遺跡¹⁶⁾、富川古康洞遺跡¹⁷⁾などの事例がある。

青銅器時代の山岳祭祀は、主として、岩石祭祀の性格を持っており、富川古康洞遺跡の場合、三韓の蘇塗のような性格とみる解釈もある。峠で行われた祭祀としては、扶餘論峙遺跡¹⁸⁾が、山頂祭祀は、統一新羅時代の河南二聖山城¹⁹⁾、霊岩月出山遺跡²⁰⁾などがある。

扶餘論峙遺跡では、斧形の模造品をはじめとする鉄製ミニチュア農工具及び鑄造・鍛造鉄斧、鉄鎌などの農工具などと共に、勃起した男根の姿が表現された土器の把手が、多くの土器類と炭化穀物と共に出土した。これらの遺物から、豊作を祈願した農耕祭祀としての性格が考えられているが、馬韓が初期の祭祀主体として推定されている(第3図)。



第3図：扶餘論峙遺跡出土の男根形把手と鉄製ミニチュア農工具(国立扶餘博物館(2007)：『扶餘論峙祭祀遺跡発掘調査報告書』の祈願)

第二に、海岸に立地する場所で、豊魚と安寧、そして、航海の際に海上での安全を祈るために行われた海洋祭祀がある。扶安竹幕洞遺跡、濟州龍潭洞遺跡²¹⁾な

どが代表的で、他にも様々な貝塚遺跡がある。

金海府院洞遺跡は、原三国時代から三国時代にかけての貝塚遺跡であるが、海辺の低い丘陵上に位置しており、厚い包含層の他に、住居跡、貯蔵穴、墳墓などが確認され、各種無文土器、小型土器、異形土製品、卜骨、骨角器、灰青色硬質土器などが大量に出土した。扶安竹幕洞祭祀遺跡²²⁾は韓国の祭祀研究上、画期となる遺跡であり、また遺跡の中心時期である5世紀代における加耶・倭系遺物の出土により多くの注目を集めた。この遺跡に関しては、後ほど別当に扱うことにする。

第三に、生業活動と関連した生産祭祀があるが、耕作地と水田などで行われている農耕祭祀、土器生産、鉄器生産と関連するものなどがある。

青銅器時代の晋州大坪里魚隠1地区の場合、耕作地から無紋土器、赤色研磨土器、玉、紡錘車、魚網錘、土珠、武具、農耕具、農具形模造品などが出土した。農耕に関連する三国時代の祭祀遺構は、扶餘西羅城と論峙遺跡で確認された。西羅城では、水田の中に土器片を蓋代わりにした壺が埋められていたが、水田の造成に関連した地鎮具的な性格が強いと考えられている。論峙遺跡は、立地の面で峠の祭祀遺跡として分類したが、遺構の内部から鉄製ミニチュア農工具、男根形の土器の把手や、各種の穀物を多量に入れた壺などが出土しており、その祭祀の内容からみた場合、農耕祭祀に分類できる。

土器生産祭祀遺構としては、新羅の遺跡である、慶州蓀谷洞窯址遺跡²³⁾が挙げられるが、土器窯47基、瓦窯1期、工房址4ヶ所、木炭窯17基などの生産に関連する遺構と土器、土偶などの2850余点の遺物が出土した。現在史跡430号に指定されている。鉄生産遺跡において祭祀の痕跡が見つかった事例は、3世紀から5世紀前半の百済の遺跡である、鎮川石帳里遺跡²⁴⁾が挙げられる。

第四に、墳墓祭祀は、支石墓儀礼、殯葬—封土祭祀、廟司祭祀、貢献祭祀に分類できるが、公州艇止山遺跡²⁵⁾、陝川苧浦里遺跡²⁶⁾、高靈池山洞遺跡²⁷⁾などの事例がある。

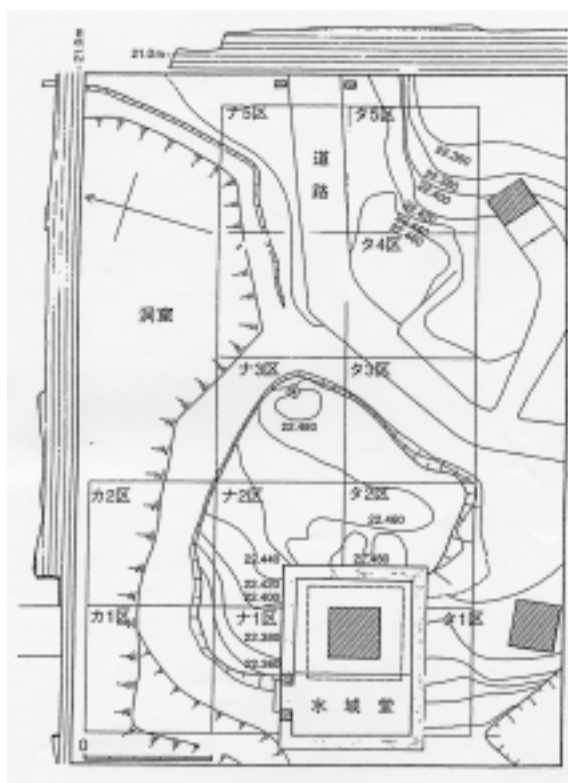
第五に、特殊な祭祀として、青銅器埋納と岩刻画儀礼がある。青銅器埋納は、特殊な形態の祭祀遺構で、

墓や建物跡ではなく、別途の場所に青銅器を埋納した祭祀の形態である。その事例としては、馬山架浦洞遺跡²⁸⁾、陝川盈倉里遺跡²⁹⁾などが挙げられる。

3. 扶安竹幕洞祭祀遺跡

(1) 遺跡の概要

扶安竹幕洞祭祀遺跡は韓半島の南海岸に突出した邊山半島の西端部にあり、行政区画上、全羅北道扶安郡邊山面格浦里竹幕洞山35の17番地に属する。邊山半島の西海岸一帯は山地と海が接しており、遺跡周辺は海拔600mの丘陵と海に囲まれているが、竹幕洞遺跡は標高22.5mの海蝕崖の上に位置し、約20kmの距離内に蜆島、食島、飛雁島、上旺登島、古群山列島などの島嶼を眺めることができる。



南部全地域でみられる土器で、この土器が出土した地域は一つの文化圏としてまとめることができるほど、共通の特徴を持っている²⁰⁾(第5-1図)。この土器が栄山江流域に出現する時期は、霊岩郡萬樹里4号墳の出土例から3世紀後半であると推定できるが、この時期が竹幕洞遺跡のもっとも早い時期に当てはまることから、早い段階における関連性が裏付けられる。竹幕洞遺跡出土土器の上限年代に関しては、報告書では4世紀前半となっているが、兪炳夏はその後発表された学術シンポジウムの論文集の中で、3世紀後半に上限年代を修正している。

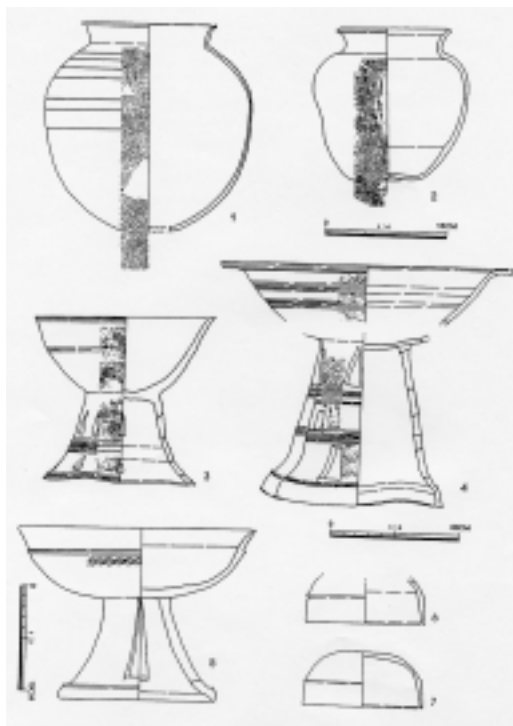
出土量が最も多い短頸壺はその多くが、4世紀中葉～5世紀後半に編年される羅州潘南古墳群から出土した土器と非常に類似している(第5-2図)。短頸壺は瓦質土器段階にみる偏球形から球形へと変化していく。

同時期の広口壺の場合、栄山江流域以外に忠清道一帯でも多くみられる土器である。広口壺に小さな把手を付けた広口長頸壺は、広口壺と器形的に類似している所が多いが、集線文、波状文などの独特な文様といくつの牛角の把手を持っていて、「竹幕洞式」と命名されるほど、この遺跡に特有の土器である(第6図)。そ

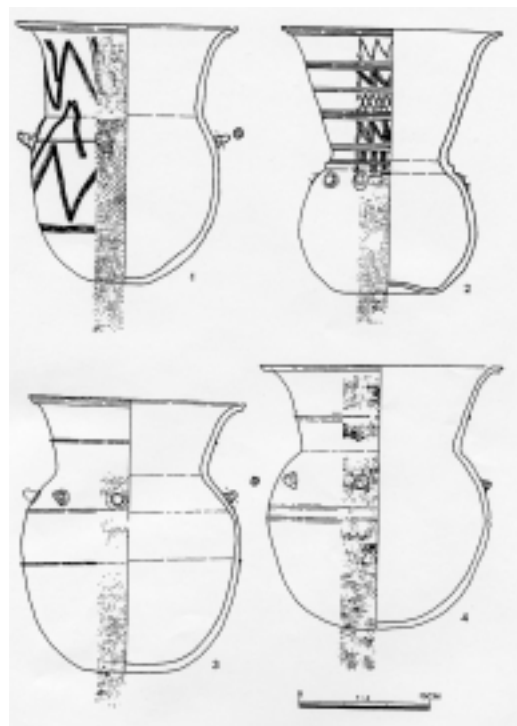
の把手の形からも栄山江流域との関連性が窺われる。

器台の場合、鉢形器台と筒形器台に分類できるが、鉢形器台は大きな杯身に八字形の器台が付いているもので、筒形器台と共に加耶地域で発展した型式であると考えられている(第5-3図、第4図)。もちろん器台の部分が短く、三角形透しなどの型式は加耶地域でよくみられるが、栄山江流域でも光州月桂洞1号前方後円墳、光州双岩洞石室墳、昇州大谷里ハンシルA地区、長城鈴泉里石室墳の例があり、これは主に大型の石室をもつ古墳から出土したもので5世紀後半～6世紀初頭に編年されている。石室の構造と出土遺物からは百済の影響はみられない。4世紀以降から5世紀にかけて百済がソウルの江南地域に都を置き、三足土器のような他地域ではみられない土器が流行していたにもかかわらず、竹幕洞遺跡からは全く出土例が見られない。

また5世紀以降の百済の遺跡でよくみられる三足土器以外にも、早くから生活用器として使用された深鉢形土器、甗はまったく出ていない。このような相異点は祭祀遺跡特有の性格を反映しているとも解釈できるが、祭祀主体の解釈にも関わる問題である。このよう



第5図：扶安竹幕洞遺跡の出土土器(国立全州博物館(1994)：『扶安竹幕洞祭祀遺跡』)



第6図：竹幕洞式土器(国立全州博物館(1994)：『扶安竹幕洞祭祀遺跡』)

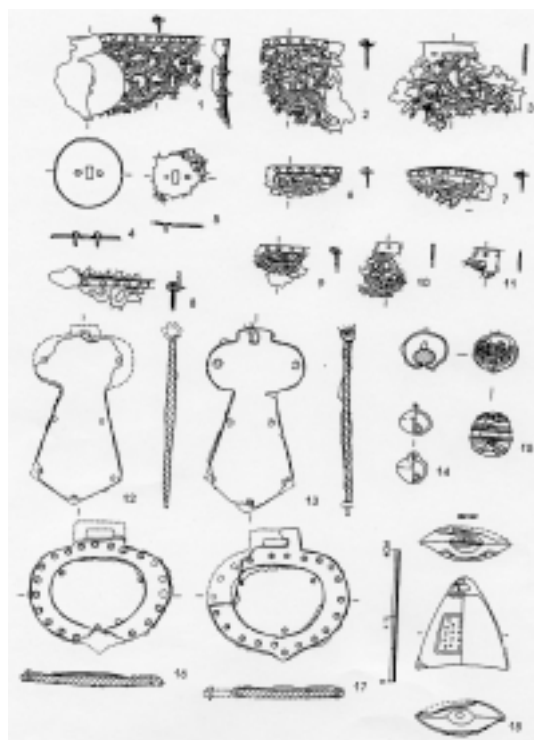
な点からも5世紀段階の祭祀は、百済の影響よりは馬韓の伝統が維持されていた栄山江流域との関わりで解釈した方が妥当であろう。

高久健仁は、竹幕洞祭祀遺跡から石製模造品と陶質土器の蓋坏2点、また高坏1点が共伴して出土していることから、竹幕洞祭祀遺跡出土の陶質土器について倭系であるとの認識を示している³³⁾(第5-5~7図)。しかし酒井清次は初期須恵器の検討から、日本における須恵器の主体が加耶系から栄山江流域へと変化することを指摘しており³⁴⁾、このような見解を受けて考えると、竹幕洞遺跡出土の蓋坏・高坏について5世紀後半の栄山江流域で生産された陶質土器である可能性も否定できないであろう。また竹幕洞祭祀出土の中国六朝(南朝)の中国青磁については、百済の交易によるものではなく、加羅による南朝朝貢の際に齎されたものとして解釈できるであろう。

金属遺物は鉄銚、鉄斧のような武器類、鞍橋、雲珠、銅鈴のような馬具類、銅鏡、鉄鏡などが多様に出土したが、数量と種類の面では武器類と馬具類が主流である。大部分の金属遺物は大甕に納入されていたことが確認されたが、大甕との関係が明らかではない一部の遺物も甕の近くで出土しており、同種・同時期の遺物であることから同じく甕の中に納入されていたと推測されている。金属遺物を納入した甕は大加耶のものであると分析された³⁵⁾。

金属遺物は個別に遺物の形態から出土事例、組合相を比較検討し、また大甕との関係を考慮した場合、大加耶のものであるとほぼ確定しているが³⁶⁾、武具と鞍橋、杏葉、銅鈴、鉄鈴、鉄鐸、鉄環、銅環などの遺物の形態は5世紀後半~6世紀前半の大加耶の古墳と推定されている高霊池山洞45号墳、多羅国の陝川玉田M3号墳などで武具・馬具が集中的に副葬された様相とほぼ一致する(第7図)。

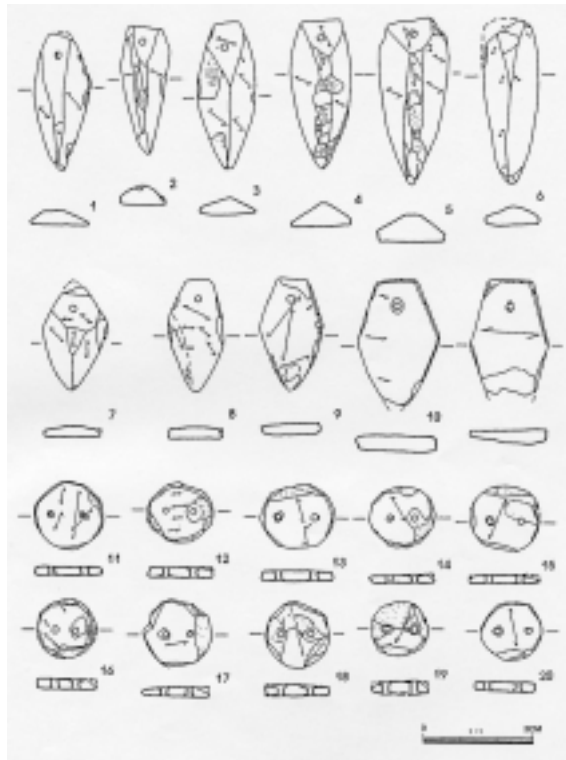
そして金属遺物をいれた大甕も高霊と陝川地域の竪穴石槨墓に副葬されたものと型式上つながると思われる。代表的な事例として高霊池山洞34号墳、陝川玉田M3号墳が挙げられる。M3号墳の年代は埼玉県稲荷山古墳の出土品との類似性から稲荷山古墳の鉄剣の年代から推定される470年とされている。



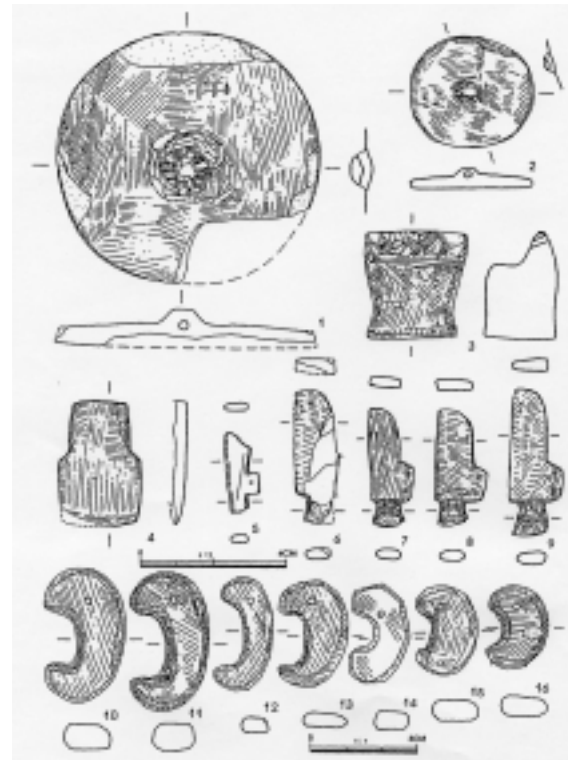
第7図：扶安竹幕洞遺跡出土馬具(国立全州博物館(1994)：『扶安竹幕洞祭祀遺跡』)

石製模造品は片岩、滑石を材料に実物を縮小模造したものである。模造の対象となるのは板甲、鎌、刀子、曲玉、斧、鏡、鐸、紡錘車、劍、鏃などの武器類、馬具類、装身具類、宝器類で基本的に古墳の副葬品の組成と類似している。竹幕洞祭祀遺跡から出土した石製模造品は有孔円板、劍形品(蟬形品)、鏡、短甲、刀子、斧、鎌、曲玉、鐸などがあるが、有孔円板が72.6%で最も多く、次に劍形品である。この2種類が全体の90%を占めるため、この遺跡の代表的な石製模造品として見ることができる。このように有孔円板と劍形品の比率が高いことは日本の石製模造品にみられる傾向である(第8図)。

有孔円板と劍形品(蟬形品)はその用途が不明であるが、石製模造品が大量に出土している日本の場合、有孔円板は紡錘車と鏡を模造したものとして理解され、蟬形品は劍形品と命名されている。そして日本で出土した有孔円板は主に滑石で作られているという特徴をもつが、竹幕洞遺跡の石製模造品は鐸のような一部の滑石製を除いて、ほとんど緑色または緑青色の片岩製である。全北大学のイ・チョンフ教授によって、肉眼



第8図：扶安竹幕洞遺跡出土石製模造品①(国立全州博物館(1994)：『扶安竹幕洞祭祀遺跡』)



第8図：扶安竹幕洞遺跡出土石製模造品②(国立全州博物館(1994)：『扶安竹幕洞祭祀遺跡』)

と偏光顕微鏡観察が行われた結果、変成岩の一種である片岩が主に使用されたことがわかった³⁷⁾。この石材は遺跡の周辺から採集されたと思われるが、滑石製品の場合も別の産地から材質が持ちこまれた可能性がある。

大きさは種類別に多様であるが、全般的に10cm以内で、有孔円板と剣形品は直径・長さが5cmを越えない。製作技法は原石で全体の形を作った後、研磨しているが、斧を除いて全ての模造品に1～2個の穴がある。

石製模造品は韓半島では貝塚や信仰遺跡、古墳などから出土した例があるが、数が少なく、出土状況もはっきりしていない。一方日本では古墳時代の集落、古墳、祭祀遺跡から祭祀と関連して大量に出土しており、その年代と性格がほぼ明らかになっている。その成果を参考にと、石製模造品は4世紀後半に古墳の副葬品として初めて出現し、5世紀代は各祭祀関連遺構や祭祀遺跡で専ら用いられた祭祀用具や、神への供献品として使用されるようになる。石製模造品は5世紀代に集中的に現われ、6世紀を過ぎてからはその一部が土製模造品か金属製や木製品に変わっていく傾向があ

る。

素文の有鈕鏡は2点出土しているが、その一つは14.4cmの大形品である(第9-1図)。有鈕鏡が出土する遺跡は日本列島で現在まで10余箇所が報告されているが、比較的規模の大きい遺跡で、山形県八幡山出土品(15.8cm)を除いてはすべて10cm以下のものである。

石製模造品のなかで最も注目されているものは短甲形であるが(第9-3図)、日本でも祭祀遺跡出土品としては福岡県宗像第三宮址の一例しかない。古墳出土品としては栃木県の會雷電山古墳が知られている。

剣形品は表面にY字形の稜線をもつa式が16個、側面に沿って稜線を付けたb式が11個、側面を角張る様に研いだc式5個、総計32点が出土した。各型式の変遷関係は比較資料がないため明確ではないが、a式が若干時期的に遅れるとする見方³⁸⁾とa-b-c式への変遷を考える所見がある³⁹⁾。

鞘袋入を特徴とする刀子に関しては(第図9-5～9)、日本の古墳での刀子、斧、鎌の出土比率が高いことから、古い段階の石製模造品に属すると考えられている。寺沢知子は初期祭祀遺跡にみられる滑石製刀

子は「古墳におけるモガリ儀礼の鎮魂の部分が転用されたもので、それはこれらの祭祀が各地で民衆の手によって自生したものではなく、政治的意図を含んで拠点的にはじめられ、その担い手が畿内政権と関わる地方の首長であったことを意味しているもの」と解釈している⁴⁰⁾。しかし材質の問題・祭祀主体の問題などを考えれば、竹幕洞遺跡の刀子形品はこの説には当てはまらない事例であると思われる。

沖ノ島祭祀遺跡と比較検討することによって、竹幕洞遺跡の石製模造品の編年を沖ノ島21号遺跡と同じく5世紀後半とみる見解がなされたが⁴¹⁾、私は後述する共同祭祀の可能性を考えると5世紀後半から6世紀前半のものであると考えている。

最後に現在までの諸説をまとめてみると、佐々木幹雄は石製模造品をヤマト王権と関わる祭祀遺物と考えざるをえないとし、倭人による製作を提示した⁴²⁾。梶山林繼と兪炳夏も倭製品として考えているが、竹谷俊夫は倭製とみるのにはまだ検討の余地があるとし、同伴土器がみられない点を指摘した後、百濟製の土器との組み合わせで日朝折衷の祭祀が行なわれたと推測している⁴³⁾。これまでの諸説は①倭製の可能性が高いとみている、②百濟との関係で遺跡の性格を解釈しているという共通点が指摘できる。

しかし材質の面、歴史的な背景、例えば百濟の熊津遷都(475年)の時期がこの遺跡では中心時期であることを考えると、百濟が祭祀の主体を担ったという説は納得しがたい。

竹幕洞祭祀遺跡出土の石製模造品は組成、剣形模造品の型式分類などから数回にわたって祭祀が行われたことがわかる。また滑石製よりも片岩製が多いことから現地製作された可能性が高いと思われる。後述する栄山江流域と九州との関わりを念頭において考えると、石製模造品がヤマト政権の勢力拡大によって倭国内に広まった祭具であるとしても、ヤマトから直接に伝わったのではなく、九州の倭人が現地で製作したか、または現地の人が習って作ったと見た方が妥当であろう。

(3) 段階別祭祀の様相と祭祀主体

以上のように、竹幕洞遺跡の出土遺物に対する再検

討を行なったが、主に土器の分析を通じて栄山江流域との関連性を指摘した後、金属遺物と石製模造品から、加耶と倭の祭祀の様相を検討してみた。しかし遺物の分析だけでは限界があり、より正確な遺跡の解明のためには、時代相・交流相の理解が伴わなければならないであろう。海洋祭祀の性格を考慮するとその重要性は一層高まる。

本報告ではまず出土遺物の再検討の結果に基づいて、祭祀様相を4段階に設定し、各段階別に祭祀主体を想定を試みる。

I 段階：馬韓(3世紀後半)

II 段階：栄山江流域勢力(4世紀前半～5世紀中葉)

III 段階：栄山江流域勢力・加耶・倭(5世紀後半～6世紀前半)

IV 段階：百濟領域の在地勢力(6世紀中葉～7世紀前半)

第I段階は、原三国時代の西南部全域でよくみられる短頸壺を中心とする祭祀で、遺物の量・種類などが制限されている小規模の祭祀であったことから、馬韓の祭祀と推測されるが、祭祀の主体は馬韓の新彌国であった。『晋書』卷三六列伝六張華条の武帝太康(282)における東夷馬韓新彌諸国二〇余国の初朝貢記事にみられる馬韓は全羅南道を指しており、ここで新彌国は栄山江流域の勢力であることがわかるが、その根拠として地理的な条件と東夷列伝馬韓条との比較が挙げられる。まず張華条の内容によると新彌諸国は「依山帶海」した自然環境を持っていて、幽州から四千里離れていると記述されているが、このような地理条件から西南海岸と盧嶺・小白山脈に囲まれている全羅地方の栄山江流域であることがわかる。そして『晋書』卷九六列伝六七東夷列伝馬韓条にみられる277～290年にわたる8回の朝貢の記事には張華条の282年の遣使が抜けており、単純に記述漏れとも考えられるが、張華条には馬韓の初の朝貢であると書かれているのに対して、東夷列伝馬韓条では277年から朝貢が始まったと記述されていることから内容の食い違いがある。このような事実から両記事にみられる馬韓は一致していないことがわかる。韓国の学界では、東夷列伝馬韓条の馬韓を百濟とする見解が有力であるが⁴⁴⁾、忠清道一帯の勢力である目支国と解釈する見方もある⁴⁵⁾。ここで注目

すべき点は、中国側の馬韓新彌国に対する認識で、初めての朝貢であったにもかかわらず大きく取り上げていることから、3世紀後半、すなわち竹幕洞祭祀初期の段階において、栄山江流域はすでに馬韓の有力勢力として認められていたようである。また馬韓の朝貢が馬韓内でも一元的ではなかったことがわかる。竹幕洞遺跡のⅠ段階における出土遺物から推定できる祭祀様相は、馬韓新彌国による朝貢記事の裏付けになると思われる。

第Ⅱ段階も祭所の伝統に基づき、Ⅰ段階に続いて土器中心の祭祀が行なわれたが、Ⅰ段階に比べて土器の器種と数量が増加し、祭祀の規模が大きくなっている。この段階においても百済との関連性がみられないことは、前述した通りに土器などの遺物の出土状況からもわかるが、その背景にある錦江流域における百済への併合時期も重要な問題点となる。韓国の考古学者の間では、その時期を墓制の変遷から4世紀中葉～5世紀中葉に求める説と、各種の遺物に百済の影響が強く見られる4世紀後半にあてる説が存在する。したがってこの時期は錦江流域の百済領域化によって、この祭祀遺跡における百済の影響力がより高まることが想定できる。しかし、竹幕洞遺跡における遺物の内容からみると、この段階においても三足土器・深鉢土器に象徴される百済系の遺物は全く見られない。この点に注目すれば、竹幕洞祭祀遺跡の主体が百済と関係を持っていなかったことが明らかになるであろう。

第Ⅲ段階は土器の器種の変化、すなわち器台のような加耶系のものが見られるようになる。また「竹幕洞式」とも呼ばれる装飾性の高い広口長頸壺が現れる。その系譜は広口壺に求められるが、集線文・波状文の独特な文様と牛角形の把手などは祭祀用として特別に制作されたことを意味する。ここで行われた加耶の祭祀の特徴は、金属遺物が主に使われているという点である。この点に着目して兪炳夏は古墳と祭祀遺跡における神觀念の未分化状態であると解釈している⁴⁶⁾。しかし三国時代の祭祀に対する研究成果が乏しい現在の段階では、慎重な検討が伴われなければならないであろう。竹幕洞祭祀遺跡の第Ⅲ段階において栄山江流域では羅州藩南地域を中心に活発な交易活動が行なわれていたが、古墳から出土した倭系遺物の存在は倭との

活発な交流関係を証明している。九州の横穴式石室⁴⁷⁾と日本の初期須恵器⁴⁸⁾との関連性はすでに指摘されているが、このような事実から白石太一郎は倭の交渉の相手が5世紀前半までは洛東江であったが、5世紀後半からは西の栄山江流域に移ったという見方を示している⁴⁹⁾。第三段階の祭祀にみられる石製模造品の存在もまた倭(九州)との頻繁な交流の証であると言えよう。しかし石製模造品に伴う土器がほとんど見つかっておらず、日本の古代における海洋祭祀の場合、石製模造品のみで行なわれた祭祀の事例がないことを考えると、倭が主体になって単独に行なわれた祭祀であったと解釈するよりは、栄山江流域の勢力との共同祭祀の可能性が高いと思われる。

『宋書』倭国伝などの所謂倭五王の都督諸軍事号は、爵号に「慕韓」がみられることから5世紀後半代においてこの地域を理解する貴重な史料となるが、慕韓の実在説によって慕韓は全南地域に比定されている³⁰⁾。慕韓は倭王珍(438)の「使持節都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事安東大將軍倭国王」の自称に初めて登場する。その後、倭王武の爵号にも3回登場しているが、この史料の重要性は、南朝時代の政治的利害関係が反映されているものの、当時の倭と南朝が韓半島の情勢をどのように認識していたのかがわかるということである。軍事支配権の主張説もあるが、現実的に諸地域に影響力を行使していたとは見なし難い。倭五王の爵号は、倭が把握していた韓半島南部の勢力に対する認識を反映しており、438年段階にみられない加羅が451年から登場するのもこの時期の加羅の飛躍的な発展に伴った結果であると言えよう。したがって加羅王・荷知(479)が南斉から冊封され、「輔国將軍本国王」の爵号を授与されたことは、当時の加羅の発展を示すものとして捉えることができるが、この加羅(大加耶)の南朝朝貢の際に海洋祭祀が行なわれたことが竹幕洞祭祀の第Ⅲ段階の祭祀様相から推定できる。しかし果して加羅の南朝遣使は、大加耶が連盟を形成するまでの勢力に成長したとしても、加羅単独で行なわれたものであろうか。特にこれが加耶の初の朝貢であったことを考えると非常に疑問を感じる。朝貢の際には、通訳と遠距離航海術の問題が要になるが、新羅の場合、377年高句麗に従伴されて前秦と朝貢しており、これが新

羅の国際舞台への初登場である。また521年梁通交は百濟使に伴って行われ、しかも「言語は百濟を待ってのち、通じる」と記述されていることから百濟が通訳するという形で対応していたようである。したがって加羅の場合も単独での朝貢はとても考え難い。そもそも大加耶連盟説自体は高靈式土器の分布に基づいたもので、最近では陝川玉田古墳群の出土遺物などから多羅国が鉄器生産の有力な勢力であったことが指摘されている。そして陝川玉田古墳群で出土した鳥文有刺儀器などの分布から想定できる祭祀の様相は、多羅国が大加耶の高靈地域ではなく、咸安地域と繋がっていたことを表している。このような事実からみて、大加耶以外の他加耶地域での動向も非常に重要であり、大加耶連盟に関する慎重な検討が必要とされる。加羅の朝貢に同伴者がいたとすれば、この同伴者は他ならない柴山江流域勢力であった可能性が高いと思われるが、石製模造品の出土状況から想定できるこの時期における倭の祭祀も柴山江流域との関係で説明できる。前方後円墳の墓制そして冠帽、鉄製ミニチュア農具などの出土遺物の共通性は、5世紀後半から6世紀前半における加耶・倭・柴山江流域勢力の交流を示す好資料であるが、ここでの倭は畿内ではない九州の勢力で、柴山江流域と九州との間には海人のネットワークが形成されており、加羅の南朝朝貢の際も優れた航海術をもって援助したであろう。竹幕洞祭祀にみられる中心時期の祭祀の様相はまさにその裏付けになっている。

最後の第四段階では土器中心の小規模の祭祀へと変化しているが、国際的な交流の中心祭場としての機能を失って、在地中心の祭祀になったことが推測される。この時期は、柴山江流域が既に百濟の領域下に入っており、仮にこの祭祀の主体が最初から百濟であったとすれば、矛盾した結果である。

3. 模造品

土製模造品は、土を材料にして実物を模して作られた物である。体系的なもので、青銅器時代から製作されはじめた、勾玉・管玉を模造した土製品があるが、その他にも土製小玉、船形土製品、動物形土製品、異形土製品も同様の脈絡で考えられる。大きさは2～3

cm程度のものから、10cmくらいのものまでと多様であるが、総じて実物よりも小さい。基本的な製作技法は大半が類似しており、すなわち、荒い粘土で簡単に成形した後、露天で焼いたものである。勾玉、管玉などは、石・ガラス製から土製に材料のみが変わったものとも考えることもできるが、卜骨や小型土器などと共伴する事例などからみて、祭祀用として製作されたものと推定される。言い換えると、実物の代わりに、神への供献物として象徴化して製作されたものであると思われる。ミニチュア土器もまた各種土器を小型化・模造化したものであるが、器種上では鉢、盞、高杯、甗などが確認されている。これについても、製作技法は簡単で、大きさも10cm以内と、非常に小さいために、実用器としては考えられない。したがって神に対する祭祀用、すなわち供献用の特殊遺物として解釈できるであろう。

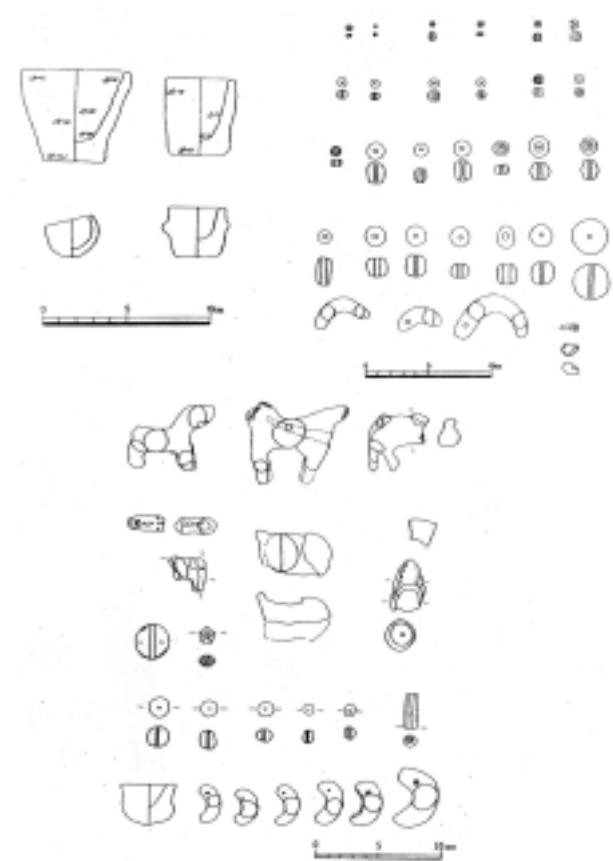
動物形模造品の中で注目されるものとしては、土馬と鉄馬があげられるが、馬は戦争、交通手段、狩猟などに有用な動物として重要視され、また「易経」の八卦の中で乾卦の象徴、すなわち天を意味する動物であるように、古くから神聖視されていた。このような馬の神聖性は新羅及び高句麗、夫餘の建国始祖の神話をはじめ、文献史料にもよく表れている。また、『三国志』魏志東夷伝韓条には「不知乘牛馬、牛馬盡於送死」とあって、牛馬を葬送に使用したと記述されているが、原三国時代の低湿地や貝塚から馬骨が出土し、また馬骨とともに卜骨及びミニチュア土器のような祭祀遺物が伴出している状況は、馬が様々祭祀の用途に用いられたことを推察させる。

以下に、祭祀遺跡出土の土馬及び鉄馬を中心に、出土状態ならびに遺跡の性格について、比較的に明らかになっている事例を、遺跡の種類別にみていくことにする。

(1) 海辺の祭祀遺跡

貝塚遺跡からは卜骨及びミニチュア土器・土製勾玉などの各種祭祀遺物とともに土馬が出土する場合がある。1980年に調査された金海府院洞遺跡⁵¹⁾、海辺に面した丘陵南端の山塊に形成された貝塚である。A地区から4点の土馬とともに、ミニチュア土器、船・勾

玉・丸玉などの土製品、また、石製模造品として有孔円板や、他にも管玉などの玉類が検出された。遺跡の上限年代は、最下層から出土した土器の年代から、4世紀代と考えられている。土馬はいずれも裸馬で、4点とも欠損しており、馬の姿態をよくとらえることはできないが、第Ⅲ層から出土した頭部の形態から、馬を表現したものと思われている(第10図)。



第10図：金海府院洞遺跡出土土製模造品(東亜大学博物館(1981)：『金海府院洞遺跡』古蹟調査報告書4冊)

また、3～4世紀に形成されたと考えられている釜山の東来楽民洞貝塚では²⁰⁾、卜骨、ミニチュア土器・土製勾玉などの各種祭祀遺物と倭系土器が伴出しているが、第3次調査地域の東側からは馬形土器が1点発見された。馬形土器は頸部に馬甲を表現したと思われる斜格子文が施されており、鞍を着けた跡と胴部に自然釉が付けられていない部分があることから、騎馬人物形土器の可能性もあると考えられている。

東来楽民洞貝塚では、製鉄施設の一部と考えられる冶鉄爐址と送風管が発見され、当時の鉄生産を知る貴重な資料となっているが、『三国志』魏志東夷伝弁辰条

には韓半島の東南部における鉄生産と交易に関する記述が見られ、金海・東来はその比定地とされている。石製模造品と倭系土器の出土からも当時の交流の様相を窺い知ることができるが、金海府院洞貝塚、東来楽民洞貝塚では、鉄を巡る交易の際に、航海の安全を祈って、祭祀が行われたのではなかろうか。また同様に貝塚遺跡から出土する土馬についても、海神への供献品と解することができるであろう。

航海の祭祀が行われた代表的な遺跡である扶安竹幕洞祭祀遺跡から出土した8点の土馬は、10cm内外の大きさで、簡単な道具を使って押印または、線刻などで細部を表現している。主に精選された粘土を用いて作られた灰青色硬質の須恵馬で、1点のみ赤褐色硬質のものがある。いずれも胴体には鞍がつけた跡が残っており、一部の土馬の背中にはX線文が刻まれている(第11図)。



第11図：扶安竹幕洞遺跡出土人形模造品と土馬(国立全州博物館(1994)：『扶安竹幕洞祭祀遺跡』)

発掘担当者は三国時代の土器に混ざって出土したことから、4世紀後半～5世紀の古墳に多く副葬された鏡子をモチーフとして、その輪郭を線刻で表現していることから5世紀代の遺物として把握している。伴出した人形土製品は、性器を強調した裸像であるが、この遺跡の性格からみて、これらの土製模造品は海神への供献物として捧げられたと考えられている。また四肢が切断され、胴体と頭部、脚部がバラバラの状態出土しているが、これは除厄の意味で儀式の中で行われた風習と考えられ、馬の尻に線刻したX印も同様に把握できるであろう。

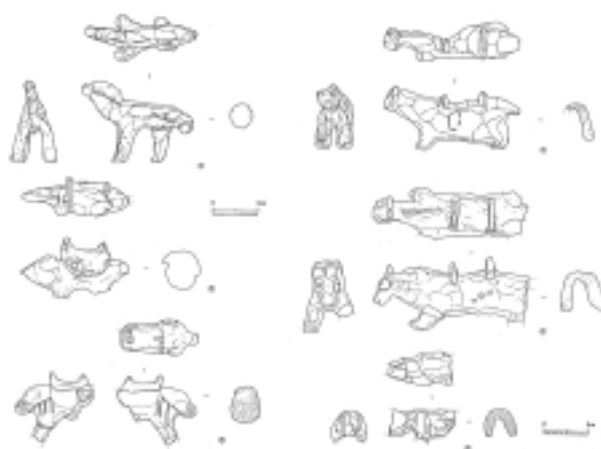
(2) 山城及び山頂の祭祀遺跡

山頂における出土事例は、狭義の祭祀遺跡での事例と、山城での事例とに大別され、また、祭祀遺構に伴う場合とそうでない場合がある。時代は主に統一新羅以降のものと考えられているが、土馬と鉄馬が伴出する事例もあって注目される。

まず、祭祀関連遺跡での事例は、南楊州国賜峰堡壘出土の土馬、大田国師峰遺跡の土馬⁵³⁾、靈巖月出山祭祀遺跡の土馬・鉄馬などが報告されているが⁵⁴⁾、ここでは靈巖月出山祭祀遺跡の中心にみてみたい。全羅南道の靈巖月出山の天皇峰に位置するこの遺跡は、統一新羅の時代から、国家による祭祀が行われてきたことが文献の記録によっても伝わるが(『三国史記』卷32雜志祭祀條小祀)、遺跡からは土馬11点、鉄馬3点の他、土製模造品、香炉の蓋、そして青瓷、白瓷などの様々な祭祀関連遺物が出土し、統一新羅時代から朝鮮時代中期にかけて、長期間祭祀が行われてきた神聖な空間であることが分かった。土器類は主に皿、瓶類が大部分を占め、時期的には統一新羅時代以降の遺物であると推定されている。特に香炉の蓋片と突出文様装飾の異形土器が出土していることは、この場所が祭祀遺跡であることを立証している。また土馬、鉄馬の出土も同様に考えられる。調査の結果、祭祀遺跡と関連した遺構は見つかっていないが、少量の瓦類が検出されており、仁宗9年(1193)神祠に雷が落ちたという史料からは、天皇峰祭場に瓦屋根の建物が存在したことが窺える。

出土遺物の中でも、土馬、鉄馬はこの遺跡の性格を理解するために、きわめて重要である。土馬は11点、鉄馬は3点出土したが、一番大きいもので現存長18.2cmの土馬がある。鉄馬は10cmに満たない。土馬は硬質の須恵馬が6点、軟質の土師馬が5点で、いずれも鞍をつけた飾馬である。報告書によると、土馬はその形態、製作技法によって3つに分類され、土馬の成形における細部的な表現からは、退化していく変遷の段階がみられるという。鉄馬は鞍が表現されて馬の首が体とほぼ水平になっているものと鞍が省略されて首を立てたものに分類されているが、全体的に錆びによる損傷が大きく、細部の表現を詳しく知ることはできない。土馬と鉄馬は、山神へ祈る祭りが行われた際に神の乗

り物として捧げられたと思われるが、『高麗史』志、卷17吉礼小祀条によると、靈巖には高麗時代に靈巖北城の下に、永保という駅があったと記されている。『世宗実録』地理志、靈巖郡条にも靈巖に2カ所の牧場が存在していたことが知られ、その中で露梁には139頭の馬を放牧したと書かれている。もちろん土馬、鉄馬の編年によって、その解釈は変わってくるとしても、このような文献記録は、月出山祭祀遺跡における馬形品の意義をより具体的に推察するためには十分参考となるであろう(第12図)。

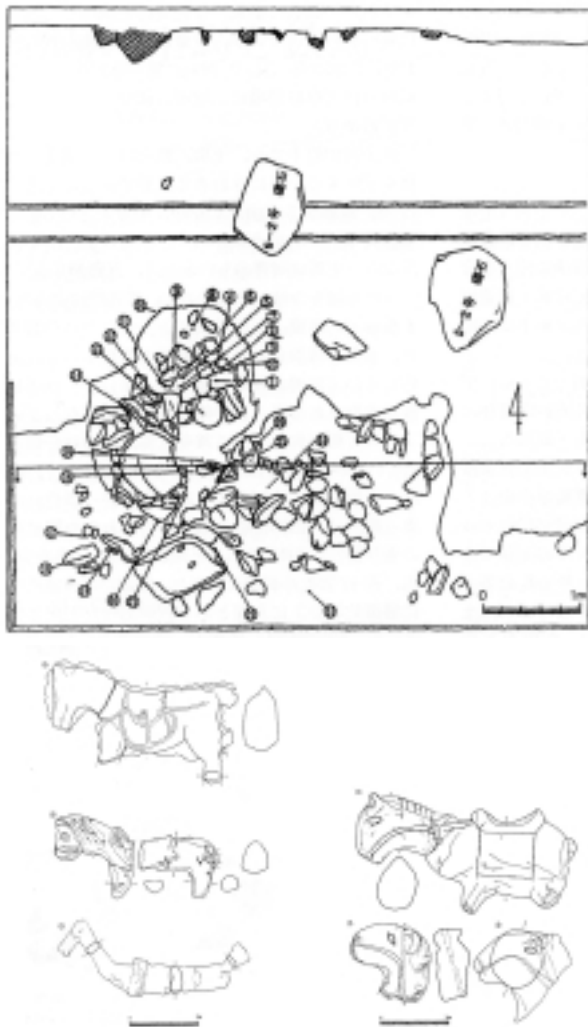


第12図：靈巖月出山遺跡出土土馬(木浦大学博物館・靈巖郡(1996)：『靈巖月出山祭祀遺跡』)

山城での出土事例としては、土馬・鉄馬が伴出した天安慰禮山城遺跡、河南二聖山城と鉄馬が出土した大田寶文山城⁵⁵⁾などがあげられる。忠南天安市北面雲竜里の海拔529.5mに位置する慰禮山城は⁵⁶⁾、百濟建国期の河南慰禮城に比定する説も提起され、学界の関心を集めたが、現在の段階では、まだその根拠が充分ではない。発掘報告書によると、城内には門跡2カ所、井戸跡1ヶ所などが検出されている。出土遺物の時期は、百濟から統一新羅にかけてのものである。出土した土馬と鉄馬は、計16点で、泥土で作られた土馬が10点、鉄馬が6点である。同発掘地点から出土した馬形模造品の長さは平均8cmで、遺物とともに祭壇とみられる石の構造物の一部も発見されたため、これらの馬形模造品は何らかの祭祀と関係があると推測されている。

京畿道広州郡の二聖山城でも⁵⁷⁾、土馬と鉄馬を含む馬形模造品が27個体分出土したが、土馬が10点で、鉄

馬が17点である(第13図)。



第13図：二聖山城1号信仰遺跡の土馬・鉄馬出土状況(漢陽大学博物館(1987)：『二聖山城—発掘中間報告書』)

この遺跡では長方形の婁閣形建物跡や、八角(D地区)・九角(E地区)・十二角建物跡などの三国時代の建物跡と祭祀遺構4ヶ所が発見されているが、東側の九角建物は天に祭祀を行う天壇、西側の八角建物は社稷壇として推定されている。馬形品は九角建物跡が発見されたE地区の祭祀遺構から出土したが、遺構の基本構造は周辺に割石を積んだ後、中央に100～150cmの大きな石を乗せたような形態で、遺物は割石の合間から出土している。馬形はいずれも飾馬で、完形のものは殆どなく、四肢がバラバラに散らばったような状態で検出されている。土馬は軟質のものが多く、長さは10cm程度である。鉄馬は11～14cm程度で、鑄造された

ものが多いが、鍛造されたものも1点ある。

礎石の上からも遺物が検出されたことや、瓦片が祭祀遺構の下部層から出土していることなどから、この祭祀遺構は、建物より後代の統一新羅時代のものであると推定されている。また、八角建物址の礎石外側から完形の石鏡1点と単孔円板、剣形品が出土したが、未完成品なども検出されていることから、現地での制作の可能性が考えられる。またE地区に近接したD地区からは、埴塼片とスラグが検出されたが、このような遺物は周辺に製鉄遺跡が存在していた可能性を示唆しており、大量の鉄馬が出土したことと関連して注目される。馬形模造品の性格については、土木工事の際に行われた祭祀と関係があるとする見解もあるが、前述したように、祭祀遺構自体は、建物より後代の統一新羅期のものであることを考えると、山城との関連性よりは、靈巖月出山祭祀遺跡の場合と同じく山神信仰を示す遺物と解釈した方が妥当であろう。

4. 新羅土偶

(1) 出土状況

新羅の異形土器(装飾土器を含む)と土偶³⁸⁾(土製模造品)は、学術的な発掘によって調査された例がほとんどなかった。1924年に発掘調査された、王族階層の古墳であると思われる金鈴塚からは、騎馬土器の一組と乗船土器の一組が検出されたが、発掘から8年後に出版された報告書によると³⁹⁾、騎馬土器と乗船土器は被葬者頭部の東北の方向に重なっていた馬具、土器などの副葬品の中に混ざった状態で発見されたという。また1973年に建築工事の時に調査された路西洞出土の土偶附長頸壺と、味鄒王陵地区鷄林路30号墳出土の土偶附長頸壺(2点とも国宝195号)、そして1993年月城路道路工事による石槨墓の発掘調査の時に出土した土偶附高杯が、学術的に調査された事例である(第14図)。

現在まで発見された土偶の中で、高杯と圓底長頸壺に付着されている完形のままの例は20点余りであるが⁴⁰⁾、破壊されて土器と分離された形で収拾された数百点の土偶は、その大半が、1926年に小泉顕夫氏によって、土木工事の際に皇南洞一帯の破壊された古墳から収拾されたものであった。1986年に出版された回想録



第14図：慶州・味鄒王陵地区鶏林路30号墳出土 土偶付長頸壺新羅(高さ34cm、新羅5～6世紀、国立慶州博物館(1995)：『国立慶州博物館』)

によると、発見された莫大な量の土偶は、味鄒王陵付近の皇南里における大形古墳群の間の土を掘り上げた時に収拾されたという。また、そこには、一人用の小形石槨墓が密集しており、副葬品は大体長頸壺と高杯で、この区域から出土した土器には、土偶を付着したものが圧倒的に多いと述べている⁶¹⁾。

1996年～2000年にかけて、慶州の競馬場予定敷地である慶州菰谷洞・勿川里の一帯で国立慶州文化財研究所による発掘調査が行われ、それまで生産地がわからなかった、国宝195号の土偶附装飾長頸壺などの生産地が、ここ菰谷洞の窯址であることが明らかになった⁶²⁾。ここでは、土器窯47基、瓦窯1期、工房址4ヶ所、木炭窯17基などの生産に関連する遺構と、礎石建物跡、高床式建物跡53棟、竪穴建物跡17棟など、合計589基の遺構をはじめ、土器、土偶などの2850余点の遺物が出土した。人物・動物土偶は112点に達する。中でも周辺の竪穴遺構内で土偶が多く出土したことから祭祀と関連して解釈されている(第15図)。



第15図：菰谷洞・勿川里遺跡 VI-19号(VI S53)出土遺物(慶州文化財研究所(2004)：『慶州菰谷洞・勿川里遺跡 慶州競馬場予定敷地A地区』)

この地域は早くから、新羅・統一新羅時代の窯址が集中して残っていたことが確認されていたが、今回の発掘によって、新羅時代の土器及び木炭窯の密集地域であったことが明らかになった。その後新羅の中心地である王京遺跡へ生活及び儀礼用の土器を供給していた新羅土器の流通生産団地であるという主な解釈がなされている。

(2) 新羅土偶にあらわれた土着宗教的要素

装飾土器の土偶は、10cmを過ぎない小さいもので、簡単な手つきや表情で人間の感情をよく表したものが多い。果敢だといえるくらい省略技法を使っているのにも関わらず、特徴をよくつかみ、作者の意図したことが十分に表わされている。一見子供たちの土遊びの

ように見えるが、よく見ると新羅人の優れた造型感覚とユーモアがその中にたっぷり込められていることがわかる。また、単に土器を装飾する工芸的・附属的な性格を持つものではなく、呪術的・土着宗教的な側面から見ると、むしろ土偶自体が一部の空間を占めている主体性を持つ存在として考えなければならない。

土偶は一般生活の多くの部分を、正直に表現している。例えば、性愛する男女の姿などは、あまりにも露骨な性生活の表現に驚くほどであるが、土偶が表す性は、陰密または羞恥なものではなく、日常的なものとして諧謔を加えたものになっている。労働力が最も重要であった古代社会で、多産、すなわち子孫の繁栄は何より重要な徳目であり、義務であった。

土偶の中には、蛇が蛙を噛んでいる姿がよくみられる。また、このような場面の中にみられる、性器を強調した棒を持つ巫堂のような男子、蛙を噛んでいる蛇の背中に乗っている人物の姿などから、土着宗教的な要素を反映されていることが考えられる。蛇は脱皮することから再生と不滅、そして蛙は卵をたくさん産むことから多産を象徴しており、蛇が蛙を噛んでいる姿は多産・豊饒と不滅が一つになったことを意味する。

土偶には琴を演奏する姿を表現したものが多くあるが、これらは4～5世紀に製作されたもので、伽耶琴が新羅に伝わる6世紀の前に伽耶琴と類似な楽器が新羅にもあったことがわかる。この新羅の琴について『三国遺事』は、琴の保管箱を人が入れるくらいと記録しており、実際日本の正倉院には長さ187.5cmもある新羅琴櫃が残されている。6世紀以後、伽耶琴が伝えられてから、新羅琴はより水準の高い楽器に改良されたが、伽耶琴は弦が12本と決まっているに比べ、土偶に表現されている新羅琴は弦が3本、5本、6本と様々である。土偶には琴以外にも管楽器も登場するが、表現されている楽器は、楽器の大きさによって演奏者の動作をきちんと表現しているため、その種類の判別ができる。土偶にこのような楽器が登場しているのは、新羅人の生活の中に音楽が深く浸透していたということを意味する。高句麗には玄琴、伽耶には伽耶琴、そして新羅には新羅独特な新羅琴があったのである。

古代新羅における狩猟は、経済活動の一環であり、また祭祀・儀礼の犠牲物を取る獲るための意味も考え

られる。動物の飼育も始まるようになり、家畜化した動物の中でも代表的なのが豚で、土偶にも多様な形態の豚(猪)が表れている。最も古くから家畜化されたとされる犬の場合は、ペット用、護身用、食用など、その目的が区別されていたようである。また、土偶には鯉や鱸などの魚類も多く登場しており、食糧確保の手段として狩猟と共に、漁労活動も盛んであったことがわかる。土偶で表現されている動物の中には、象や猿のような本来韓半島には生息しない動物もある。想像で作ったとは考えられないほど、各動物の特徴を正確に表現していることから、当時の外国との交易・交流の様相が推定できる貴重な資料と言えよう。

古代祭祀において、時に祭祀の対象化あるいは表象化された遺物が存在する。装飾土器の土偶は前述した通り、そうした性格を十二分に有している。対象化されたものは、馬・鳥(鴨)、蛇、蛙などの動物、人物、そして祭祀(呪術)の場であった。土偶を用いて、再生、穀物の豊饒・多産を願望する模倣儀礼を土器というキャンバスの上で表現したものとして理解できる。

(3) 新羅土偶の歴史的な背景

以上、装飾土器の土偶を中心にその土着宗教的要素について考察を行ったが、新羅土偶は5世紀から6世紀にかけて新羅が強力な国家としての基盤を固める時期に、主に5世紀代を中心に、一般的な小型石槨墓の副葬品として製作されたと考えられている。

土偶・装飾土器という、祭祀遺物の歴史的な背景は次第に明らかになりつつあるが、皇南洞の一画をしめす古墳群において、各種の土器が充填された「一見土器蔵」という様相の出土状況、そして、その大多数が装飾土器であったという記述は重要であろう⁶³⁾。このように、装飾土器を有する古墳は、慶州古墳群において地点的にも集中する傾向があるが、前述した通り、数十基の古墳群から、数百の土偶が出土した様子からも窺える⁶⁴⁾。

ところで、装飾土器、土偶の慶州以外の出土例は少ない。釜山東萊の福泉洞10号墳出土の亀装飾器台が唯一の出土例であり、今後の検討を要するが、装飾土器に多い有蓋高杯、長頸壺とは器形上で異なっている。この古墳は5世紀の第3四半期頃に比定されている

が⁶⁵⁾、この時期以降、東萊地域は新羅との関係がきわめて深くなっている。

慶州では、金鈴塚のように騎馬人物形土器・船形土器などの形象土器を出土する古墳と、装飾土器・土偶を出土する皇南洞一帯の小規模な古墳群と、これらの遺物を副葬しない古墳群がある。金冠塚・瑞鳳塚・天馬塚・皇南大塚南・北墳において、子持器台などの異形土器を除いて、形象土器や装飾土器・土偶が出土していないことは示唆的である。金鈴塚のみ例外といえるが、これら5世紀中葉以降の王陵ないし王陵級古墳におけるあり方は、装飾土器・形象土器に表象化される祭祀形態と異なっていたことが推定できる⁶⁶⁾。

新羅が洛東江の東の慶北一帯を支配する大きな聯盟王国を完成したのは、奈勿王麻立干(356~402)の時と考えられている⁶⁷⁾。その後、實聖麻立干(402~417年)、訥祗麻立干(417~458年)、慈悲麻立干(458~479年)、炤知麻立干(479~500年)など、5世紀の王の称号は麻立干であったことから、5世紀を麻立干時代と称しても過言ではないであろう。すなわち尼師今の代わりに麻立干という王号を用いており、征服と同盟を通じて、斯盧国が強力な国家として飛躍していた時代であった。そして奈勿王麻立干の時から三姓交立がなくなって、金氏が王位を独占して世襲することとなり、訥祗麻立干の時、父子相続制度が確立した。慈悲麻立干と炤知麻立干の時には、6村が6部に改編され、中央集権的な体制が整ったが、郵驛が設置され、首都では市肆を開かれて物貨の流通が行われるようになった⁶⁸⁾。

このように、新羅は5世紀を通じて王権を強化し、大型古墳を築造しはじめる。麻立干の称号が中国式の王に変わるのは、6世紀の智證王の時である。すなわち6世紀初頭に、国号を新羅とし、中国文化の受容が本格的に始まった。仏教はすでにその以前の5世紀には新羅の領域の北部地方に波及され始めてはいたが、新羅の王室が仏教を公認する前の段階であった。炤知麻立干代、高句麗を通じて阿道が一善(善山)地方に宣導しはじめたが、全国的には普及されておらず、王室が仏教を正式に認めたのは、6世紀に入ってからである。

したがって、このような時代的な背景の中で、新羅で土偶が作られ、外来的な要素のない純粋な新羅の風

土がそのまま反映されているのである。その表現が非常にリアルで、現世での生活相と、様々な動物の象徴性が劇的に融合されて呪術的な要素を生み出している。蛇が蛙を食べる瞬間と性器が強調された巫堂との結合はまさに呪術的な願いが込められた新羅人の土着宗教的な様相をそのまま象徴している。仏教受容の過程における異次頓の殉沔⁶⁹⁾はよく知られているが、新羅の文化は高句麗と百済に比べて土着宗教的な性格が強いことから、仏教受容の段階でも反発があったようである。このような土着宗教的な生活の一面を、現代の我々は土偶を通じて窺い知ることができるのである。

土偶は新羅が強力な古代国家として拍車をかけていた5世紀頃、集中的に作られた。その後、三国が統一され、時間の流れと共にその姿は消えていったが、土偶が新羅固有の文化であることに変わりはない。また韓半島の陶術文化の始まりとも言えるであろう。高句麗人が古墳壁画に彼らの生活と文化を描いたとすれば、新羅人は土で作った土偶で1500年前の自分らの姿を残した。土偶は楽天的で率直であった新羅人の人生をそのまま表現した独特な文化遺産である。

5. 有刺儀器

(1) 素材の問題

有刺儀器の性格を理解するためには、素材として使われた鉄鋌に関する正確な分析と解釈が必要である。

鉄鋌は洛東江下流地域と慶州地域を中心に4~6世紀にかけて大量出土している。5世紀代の鉄鋌にみられる形態的な特徴は、両端が広くなっており、完全な対称形ではなく最少幅は端の幅が広い方に傾いていることから板状鉄斧形鉄鋌との連繋性が考えられる。しかし板状鉄斧形鉄鋌が両端の厚さにはっきりとした差異があるのに比べ、鉄鋌は両端の厚さに差がなく次第に薄くなっている。4世紀第3四半期の福泉洞38号から典型的な鉄鋌が出ており、出現時期は4世紀中葉であることが明確となった。

鉄鋌の用途に関する解釈としては実物貨幣・買地券、交換・貨幣価値をもつ鉄素材、威信財、貨幣、聖性をもつ貨幣など様々な機能や性格が想定されてきた。

鉄鋌を鉄素材として使用した代表的な例として有刺

儀器が挙げられるが、金海良洞里8号、蔚山下垈の例にみられるように、最初の段階では板状鉄斧形鉄鋌を素材として用いており、弧状の刃など板状鉄斧の痕跡を色濃く残している。即ち初期の有刺儀器は蕨手文などを施して板状鉄斧形鉄鋌を装飾したものであり、武器、利器の用途のために加工され、製作されたものではない。このような点から考えると有刺儀器は板状形鉄鋌自体がもつ象徴的な意味を強調した儀器であると解釈できるであろう。

そして4世紀中葉に出現する鉄鋌を素材に作られるようになった有刺儀器の場合、地域ごとにその装飾形態にも変化が生じて、5世紀代には刺の形態がC字形、三角形、三角形を前後に折った形など多様な型式が現われるが、このような刺の変化は利器としての機能性をもたらすためではなく、製作工程の省略などによる蕨手文の変形であると思われる。したがってこの時期の有刺儀器も板状形鉄鋌と連繋性がある鉄鋌を装飾したもので、その基本的な性格は変わらない。

つまり有刺儀器は板状鉄斧形鉄鋌、鉄鋌に装飾を加え、儀器として葬儀・祭祀に使われた後、埋納されたものであり、このことから板状鉄斧形鉄鋌また鉄鋌は単純な鉄素材または貨幣として使われたものではなく、板状鉄斧に繋がる概念をもつ象徴的なものであり、有刺儀器はその鉄がもつ概念を極大化した形であると思われる。

有刺儀器の以上のような性格からみると、陝川玉田古墳群で代表される鳥文有刺儀器は、鉄鋌ではなく鉄板などの素材を用いて製作されたことから、全く別の性格をもつ儀器であることがわかる。従来、有刺儀器に関する解釈は、形式的な要素を優先に行なわれてきたために鳥文有刺儀器を異形有刺儀器とみて同じ範疇で考えてきた。しかし同じ鉄素材であっても基底にある概念が異なることから、単なる地域色の違いではなく別の儀器として理解しなければならない。

(2) 他の儀器との共伴関係

儀器に蕨手文を施した例は3～4世紀の鉄矛でも見られる。実用的な鉄矛に比べ全体的に長形化して、横に蕨手文のような装飾を施した鉄矛は、共伴遺物からみて3世紀末頃に現れ、主に洛東江東岸の地域の細長

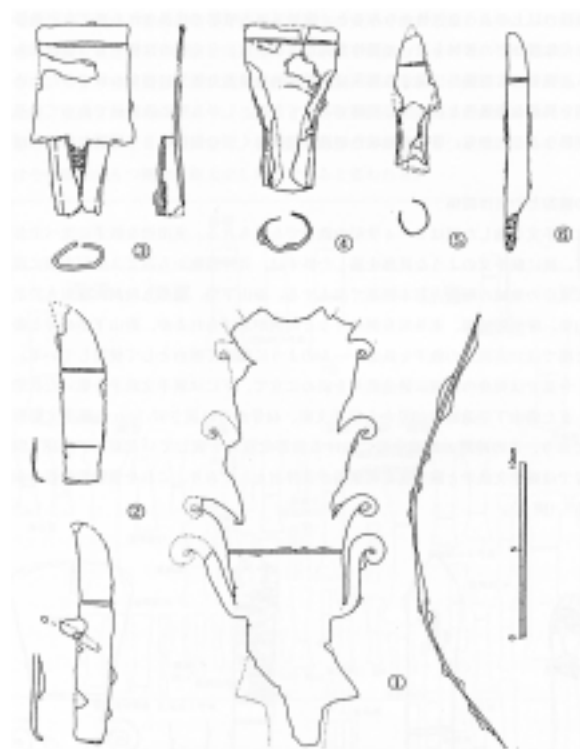
方形木槨墓で出土する。蔚山下垈、慶州九政洞、慶州九於里1号、蔚山中山里、慶州隍城洞、東萊福泉洞60号などの例があげられるが、蔚山下垈46号と慶州九政洞古墳2槨では10点以上の鉄矛を鉄道レールのように敷いて棺台として使用している。慶州の九於里1号墓では死身の周囲に鑄造鉄斧を斜めに立て、下には蕨手文鉄矛を敷いた状態で検出された。また蔚山下垈遺跡の43号から蕨手文銜、44号からは長さ97.1cmの蕨手文鑿形利器が出土しており、この時期の鉄器全般における儀器化現象を表しているが、下垈18・24・45・46・65号では蕨手文鉄矛と蕨手文有刺儀器が共伴出土しており、これを儀器性鉄器の画期と設定できる⁷⁰⁾(第16図)。



第16図：蔚山下垈46号墳出土儀器性鉄矛と有刺儀器
(徐始男・李賢珠(1997):『三韓・三国時代鉄器の儀器的性格に関する一考察』;『伽耶考古学論叢』2、駕洛国史蹟開発研究院)

斧、鎌、刀子を模造し鉄製ミニチュア農工具と有刺儀器が共伴出土の事例もあるが、鉄製ミニチュア農工具は高霊本館洞古墳、池山洞古墳、快賓洞、南原月山里古墳など、主に高霊地域から出土しており、5世紀初頭の大型木槨墓である高霊快賓洞古墳群1号の封土からは有刺儀器が1点検出された。身部だけが残存しており全体的に曲がった状態である。左右五つの対称形の刺を持つが、下部には鉄板を切断して三角形の刺を、身部には四つの刺を外に曲げて蕨手文を施していた。厚さは2mm程度で外側にいくほど薄くなる。高霊地域では最古の例で、従来の型式の範疇に属さない新しい資料である。現在まで高霊地方で出土した有刺儀器は3点のみで、全体的な把握ができない状況ではあ

るが、5～6世紀代に流行した高霊地域特有の鉄製ミニチュア農工具が、高霊快賓洞古墳群1号において初見され、有刺儀器と共伴して出土することから、5世紀初頭におけるこの地域での新たな祭祀儀礼の形態が窺える⁷¹⁾(第17図)。



第17図：高霊快賓洞古墳群1号出土鉄製ミニチュア農工具と有刺儀器(嶺南埋蔵文化財研究院：(1996)『高霊快賓洞古墳群』；嶺南埋蔵文化財研究院学術調査報告書第3冊)

そして6世紀前半の竪穴式石槨墓である快賓洞古墳群10号からも土器、鉄製ミニチュア農工具のセットと共に有刺儀器が出土したが、身部だけが残存していて、左右に大小の対称をなす四つのC字形の刺が作られており、鎌が身部に附着された状態で検出された。

大伽耶の中心地である高霊地域は、池山洞古墳群の発掘調査を契機にその実態が知られるようになったが、この古墳群で出土した高霊様式土器の拡散過程を通じて大伽耶と周辺国との関係を設定することが可能となってきている。5世紀後半と推定される大伽耶の最古の高塚古墳池山洞35号墳では、東部の護石の上に位置する祭祀遺構35D号から有刺儀器が1点検出された。池山洞古墳群では合計379点の鉄製ミニチュア農工具が出土したが、池山洞35号からは23点が被葬者の足部

分の左側から纏まった状態で検出された。

模造される鉄製農工具は日本列島でも出土しているが、雛形鉄器ともいう。模造開始段階の4世紀後半代は、鉄製の農工具と鉄製ミニチュア農工具とが、主要器種に違いはあるものの、共伴することが指摘されている。また三重県石山古墳の例にみられるように滑石製模造品も4世紀の後半から主として農工具を中心に模造が始まる⁷²⁾。日本における鉄製ミニチュア農工具の起源を韓半島に求める見解もあるが⁷³⁾、実際に、型式別セット関係など、類似点が多いことから、石製模造品と共に検討されなければならない課題である。

(3) 出土位置

有刺儀器は柄部が作られていて、祭祀儀礼に使われた後埋納された可能性が高いと考えられるが、現在までの出土状況からは鉄鋌、鉄製農具、武器類とともに埋葬空間で多く検出されており、主要埋納品としての性格をより強く示している。

慶州皇南洞109号墳は最古の積石木槨墳であるが、墳丘内に四個の積石石槨があり、第3・4槨が第1・2槨より先行すると推定されている。第3槨では東側に土器群、西側に遺骸が置かれ、両耳に位置するところから金環が装着された状態で出土した。東枕で右に鉄刀、左に有刺儀器が配され、足部には、鉄刀、鉄鏃、鉄矛などの武器が埋納されている。したがってこのような副葬状況から4世紀後半の慶州地域における有刺儀器は鉄刀と同様の威信財としての性格をもっていたと考えられる。

また祭祀儀礼に使われたことを立証できる具体的な事例もある。5世紀後半の積石木槨墳の慶州飾履塚は径30m、高さ6m以上の規模と推定されているが、木槨直上に置かれた状態で鉄矛、破碎した高坏、積石内での長頸壺、さらに積石外で鉄矛2点、有刺儀器2点、鎌1点が出土しており、墳丘の築成の過程で祭祀が執り行われたことが窺える。

このような墳墓祭祀の儀式に使われた事例は高霊地域で多くみられる。5世紀初頭の高霊快賓洞古墳群1号の場合、木槨上部の封土(墳丘)層から大壺2点、鉢形器臺6点とともに有刺儀器1点が出土したが、いくつかの器台を除いて土器は全て破片で検出された。こ

のような出土状況から封土築造の際に祭儀行為が行なわれ、土器と有刺儀器が使われたことがわかる。

そして竪穴式石槨墓である池山洞32・33・34・35では各遺構の護石の外側に大甕が2～3個、また護石から少し離れている所から器台をはじめ色々な種類の土器が破片で出土したが、35号墳の東部の護石の上に位置する祭祀遺構35D号から有刺儀器が1点出土した(第18図)。

時代は少し下るが6世紀中葉以降の陝川地域でもこのような有刺儀器の使用例がみられる。横穴式石室墳の苧浦E-2号からは封土の中から有刺儀器、高杯、蓋、鉄刀子、棺の装飾金具、鑿形鉄器などの遺物が確認された。9号周溝からも高杯、蓋、甕、有刺儀器などが出土したが、地面から若干上の層で確認されたことから墳墓築造以後の墳墓祭祀儀礼に伴う祭儀物の可能性がある⁷⁴⁾。

以上の出土状況から、高霊地域では大甕と器台類などの土器とともに有刺儀器が墳墓祭祀の儀式に使われたことがわかる。鉄製ミニチュア農工具などの儀器が高霊地域に限定して分布していることから、この地域では有刺儀器が主要埋納遺物としての性格よりも、主に祭祀儀礼に使用される儀器として理解されていたことがわかる。

有刺儀器は新羅・伽耶地域で多くの古墳に副葬品として利用されていたが、埋葬空間以外でも検出されていることから、主要埋納品と祭祀儀礼用の儀器という二つの用途が考えられる。

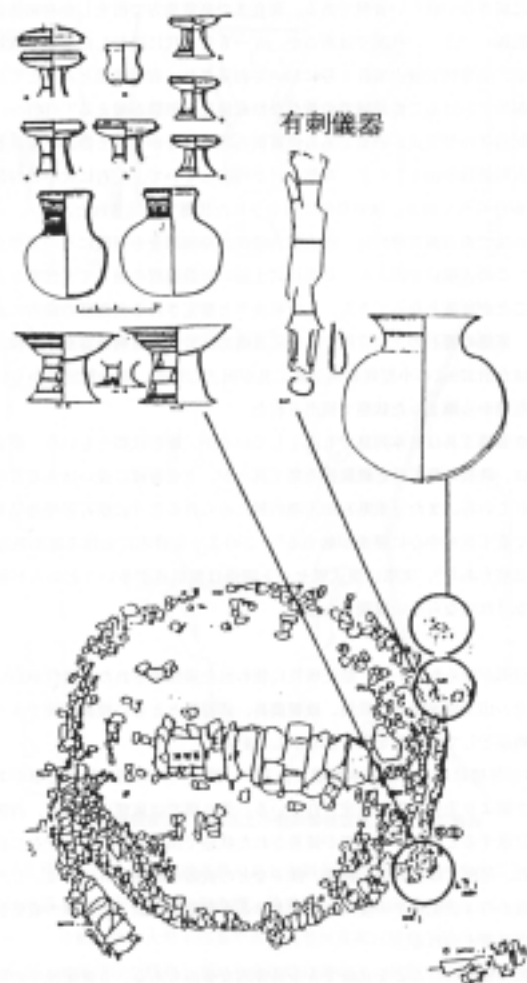
(4) 地域的な分布から見た変化様相と段階設定

有刺儀器は各地域毎に多様なプロセスがあり、それぞれに有刺儀器が持つ意味、所有形態が異なって表われる。また有刺儀器の段階設定について素材として使われた板状鉄斧形鉄鋌と鉄鋌の変化過程と密接に関係している。本稿では有刺儀器について地域別に発生、変遷、消滅する過程を大きく4段階に分けて設定した。

〈1段階〉

有刺儀器の発生期(3世紀初～4世紀前半)A-I型式；板状鉄斧形鉄鋌・蕨手文

金海良洞里8号、蔚山下岱の例にみられるように、最初の段階では弧状の刃など板状鉄斧の痕跡を色濃く



第18図：高霊池山洞35号祭祀遺構出土有刺儀器と土器(金東淑(2000)：「新羅・伽耶墳墓の祭祀遺構と遺物に関する研究」；慶北大学校考古人類学科文学碩士学位論文、p. 25より作成)

残している。この時期は鉄器の副葬が土器に比べ顕著であり、細長い儀器性鉄矛と板状鉄斧形鉄鋌の大量埋納とともに鉄製品が多様化される。そしてその副葬品に追加されるのが、有刺儀器である。

有刺儀器の最初の段階にみられる蕨手文は儀器性をもつ鉄矛の装飾要素と共通するが、蔚山下岱の例のように有刺儀器と儀器性鉄矛がセットで埋納されたことにその意味があると思われる。この装飾要素は3世紀中葉に流行したが、嶺南地域以外では存在しない。3世紀に入ってから弁辰地域の大型墓から鉄器が大量に埋納されることの延長線で有刺儀器がもつ意味を考えた場合、経済的な富の象徴として有刺儀器、軍事的な象徴として儀器性鉄矛が埋納されたと考えられる。

〈2段階〉

地域的な分化期(4世紀中葉～4世紀後半)A・B－Ⅲ型式；鉄鋌・蕨手文、C字形

儀器としてもつ性格は基本的に変わらないが、鉄鋌を使用することから加工が容易になり、慶州、蔚山下岱、金海禮安里、東萊福泉洞の例でみられるように、装飾に多様な変化が生じる。特に東萊福泉洞で代表されるB型式の出現、また金海地域におけるバラエティーに富んだ装飾が施された独自の有刺儀器的製作などから洛東江下流域の地域色が目立つようになる。

〈3段階〉

地域的土着化期(5世紀代)B・C・D－Ⅲ；鉄鋌・C字形、三角形、折った三角形、E－Ⅳ；加工された鉄板、鳥文

有刺儀器的の多様化はさらに進行して地域色がはっきりと表われるようになるが、東萊福泉洞ではB型式、慶州地域ではC型式、大邱地域はD型式、陝川地域はE型式の有刺儀器が主に出土している。また洛東江東岸流域では製作工程の省略などで装飾が簡素化していくのに対し、咸安・陝川地域圏すなわち洛東江の西岸地域では、鳥文有刺儀器が出現するようになり、東・西岸両地域が顕著に対比されるようになる。

鳥文有刺儀器は加工された鉄板を素材として使用していることから、他地域の有刺儀器とは基本的に異なる性格をもっていると考えられるが、このような事実に変遷の過程でもこの地域のみ特殊な様相をみせていることから確認できる。また他の地域の有刺儀器は、被葬者の身辺から離れて、武具などの副葬品とともに埋納されたが、咸安・陝川地域圏では古墳の規模によって鳥文の装飾を施した大形有刺儀器が被葬者の身辺に1点のみ埋納され、有刺儀器が出現する5世紀前半から消滅する6世紀中葉まで変わらぬ埋納様相を見せる。ここで注目すべき点は大伽耶聯盟の盟主である高霊地域においては有刺儀器的の出土例が3点しかなく、咸安・陝川地域に集中していることである。しかし高霊地域からは鉄製ミニチュア農工具が大量出土しており、農業生産と関連する儀器として高霊の地域色を表している⁷⁹⁾。

〈4段階〉

消滅期(5世紀末～6世紀)C・D－Ⅲ；鉄鋌・三角

形、折った三角形

福泉洞古墳群では5世紀末、大邱・慶山地域では6世紀前葉に消滅するが、金海・陝川地域では6世紀まで残存している。6世紀後半のものと推測される陝川芋浦9号の例にみられるように、装飾、三角形の刺は退化して鉄板にあげた小穴しか残っていない形である。消滅の理由として考えられるのは、各地域(国)ごとに行なわれていた鉄または鉄器的の生産が新羅に併合され、統合されていったことに起因すると思われる(第19図)。

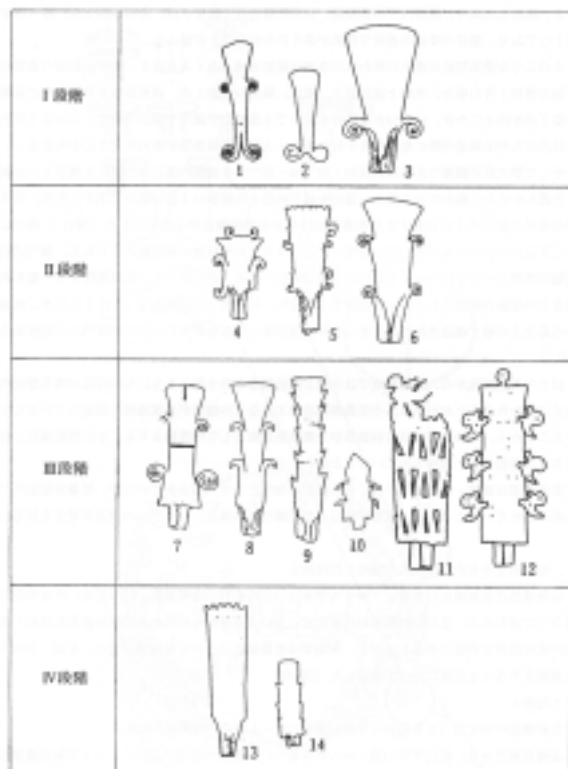
(5) 鉄及び鉄器生産と有刺儀器

金海地域では有刺儀器的の最古の例がみられ、4世紀を中心に6世紀の消滅期まで多くの有刺儀器が出土している。『三国志』魏志東夷伝弁辰条には「国から鉄を産出する。韓・濊・倭がみな鉄を取っている。どの市場の売買でもみな鉄を用いていて、中国で銭を用いているのと同じである。そしてまた(楽浪・帯方)二郡にも供給している。」という記事がみられ⁷⁶⁾、韓半島の東南部における鉄生産を窺わせる⁷⁷⁾が、この記事に見られる国は弁韓地域である可能性が高いと考えられていて、金海の狗邪国がもっとも有力な候補である。また狗邪国の別名、「金官国」⁷⁸⁾の金は鉄を意味し、『日本書紀』のこの地域をいう「須那羅」、「素奈羅」の表記も「쇠나라」(鉄の国)と解釈できる⁷⁹⁾。

有刺儀器をはじめ、金海地域における豊富な鉄の生産を裏付ける考古資料は多いが、その中でも特に大成洞古墳群の出土遺物は注目すべきである。この古墳群は1～5世紀にかけて築造された金海地域の支配層の墓域として考えられているが、1993年の発掘調査で確認された2世紀前半の12号の木棺墓からは、頭に鉄帯を付けた人骨が検出されており、金銅冠の源流を窺わせる貴重な資料を提供している。そして4世紀代の木槨墓である2号墳と13号墳からは、巴形銅器、筒形銅器、璧玉製玉杖、璧玉製石鏃など当時の日本列島との交流関係を表す倭系の遺物が出土したが、このような遺物から金海地方では鉄生産を基盤に活発な交易活動が行なわれていたことがわかる。

東萊福泉洞古墳群からは多様な型式の有刺儀器が出土しており、この地域における鉄生産の歴史を物語っているが、C字形の刺をもつB型式の有刺儀器が5世

g6. 韓国における祭祀遺跡・祭祀関連遺物
—沖ノ島祭祀の位置づけのための比較検討資料—



1. 金海良洞里8号 2. 慶州皇悟里14号 3. 蔚山下垵46号
4. 金海礼安里104号 5. 金海礼安里150号 6. 東萊福泉洞60号
7. 昌原道溪洞18号 8. 東萊福泉洞11号 9. 慶州金鈴塚
10. 大邱達西37号 11. 陝川玉田47号 12. 咸安道項里3号
13. 陝川芋浦里E2号 14. 大邱伏賢洞154号
第19図：有刺儀器の形態変遷による段階設定

紀を中心に集中的に出土している。多大浦、東萊は『三国史記』の居柒国、『日本書紀』多多羅に比定される地域で、踏鞴(たたら)が日本語で製鉄技術関連用語であることから鉄生産の可能性が裏付けられる⁸⁰⁾。

慶州の中心古墳からはA・B・C型式の多数の有刺儀器が出土したが、慶州を中心とする斯盧国は、『三国遺事』巻1にみられる昔氏の始祖脱解が冶匠であるとの伝説からも鉄生産を基盤に新羅へと成長していったことがわかる。そして『三国史記』巻38～39職官上・中によると、新羅では鉄鋤典という官司を別において専門的に金属の鋤鋤と金属器具の製作を行っていたが、また工匠府を別に設置し、金属工芸の技術群を掌管したと記述されている。このような鉄生産を裏付ける考古資料として慶州市隍城洞遺跡が挙げられるが、製鉄炉、溶解炉、精錬・鍛錬鍛冶炉などの遺構が見つかり、4～5世紀において製鉄が一貫体制で行

なわれたことを示している。

蔚山下垵から出土した有刺儀器は、初期段階の型式として蕨手文を施したもので、蕨手文儀器性鉄矛と共伴出土している。またこの遺跡では板状鉄斧形鉄鋌をはじめ数多くの儀器性鉄器が出土しており、鉄器全般における儀器化現象を表している。『三国史記』巻4列伝4居道条によると脱解代の居道が居柒国と于尸山国を攻略した記事がみられるが、于尸山国の位置が蔚山地方に比定される。記事にみられる攻略の目的を鉄生産とめぐる争いとみる見解もあるが⁸¹⁾、このような解釈は有刺儀器の出土状況からも充分可能であろう。

大伽耶⁸²⁾の場合、現在の行政区域上陝川郡に属する「冶爐」という地方が本来高霊地域であって、その地名から窺われるように鉄の生産と関連がある⁸³⁾。『世宗実録』地理志陝川郡条「沙鉄産冶爐縣、南心妙里有鉄場、歳貢正鉄九千五百斤」の記述からもこのような事実は確認できる。有刺儀器の出土例は少ないが、それは鉄製ミニチュア農工具という儀器が主要埋納品であったためで、高霊地域では有刺儀器が葬送儀礼の祭祀に使用されていた。このような主要埋納儀器の相違は、地域色を表すとともに根底にある思想的な観念の違いに起因すると思われる。

陝川地域は玉田古墳群の付近には多羅里という地名が遺存しており、『日本書紀』にみえる多羅国⁸⁴⁾の中心地であった可能性が高い。玉田地域は高霊式土器の出土など大伽耶との親近性から、大伽耶聯盟体の一員として重要な小国であったと見るのが定説的であるが⁸⁵⁾、鳥文有刺儀器に見られるように、儀器性鉄器においては咸安地域とより密接な関連性が考えられる。趙榮濟は玉田古墳群から出土した金属遺物の量が、大伽耶の池山洞古墳に比べて異常に多いことから玉田地域には大伽耶に鉄及び鉄製品を供給する集団が存在していたと解釈した⁸⁶⁾。鳥文有刺儀器は有刺儀器として分類してみたが、素材・形態的な面からみて、基本的に他の有刺儀器とは異なる性格をもつ儀器であることがわかる。鳥の装飾から死者を送るために葬送儀礼に使われたと推測できるが、大伽耶聯盟の一員であった多羅国は豊富な鉄器生産を経済の基盤にしていたために、その支配者は高度の鍛造技術が要求される装飾性の強い有刺儀器を通じて権力をアピールしたとも考えられ

る。

このように有刺儀器の違いにより設定される地域圏は文献記事に見られる金官国、居柒国、大伽耶、多羅国、于尸山国、斯盧国(新羅)の鉄及び鉄器生産とほぼ一致することがわかる。初期段階に見られる有刺儀器は板状鉄斧形鉄鋌に蕨手文の装飾を施した個人の威信財としての性格が強いものであったが、次第に地域ごとに定着し、多様な型式へと変化していった。そして慶州、高霊の出土例に見られるように、時には祭祀儀礼の場で儀杖として使用されていた。

このような地域色の表れは、鉄生産を担っていた集団が地域ごとに異なることを示すと同時に、彼らの自己主張のシンボルとして有刺儀器が使われたことを意味する。有刺儀器は鉄鋌がもつ象徴的な概念の極大化された形であることから考えると、有刺儀器による地域圏の設定は新羅と加耶諸国における鉄生産の実態を直接に反映していると言っても過言ではないであろう。

6. おわりに

この度は、沖ノ島の祭祀を理解し、位置づけるための比較検討資料として、韓国における祭祀遺跡・遺構の事例を概観し、韓国における祭祀遺跡・遺構の事例を立地別に紹介し、今日までの調査経過と研究動向について簡略にみた後、古墳、祭祀遺跡・遺構から出土している模造品、鉄製儀器を中心に考察を行った。

祭祀関連遺跡における馬形模造品の場合、神への捧げ物としての性格が考えられ、航海の安全や山神への様々な祈願の際に、供献物として用いられたと思われる。特に統一新羅期に開始された鉄馬の使用は、朝鮮時代には鉄馬自体が神堂に祀られる対象となり、現代においても、江原道三陟地方の城隍堂の内に鉄馬を奉納する例が見られているが⁸⁷⁾、主に山間地域であることは大変興味深い。このような宗教民俗事例の検討も、古代における祭祀のあり方を復元する際に不可欠なものであろう。

また、数多くの土馬が出土している日本での鉄馬の事例は、栃木県日光・二荒山(男体山)の祭祀遺跡から2点出土するのみであることを考えると⁸⁸⁾、鉄馬は韓国特有の祭祀遺物としてみることができるであろう。

新羅土偶の場合、外来的な要素のない純粋な新羅の風土がそのまま反映されており、土着宗教的な様相が表れている。土偶自体が主体性をもっており、その表現が非常にリアルで、現世での生活相と様々な動物の象徴性が劇的に融合され、呪術的な要素を生み出している。土偶は新羅が強力な古代国家として拍車をかけていた5世紀頃、集中的に作られたが、土偶が付いた装飾土器は慶州地域の古墳に集中的に出土し、その出土古墳は、階層的に上位の積石木槨墳ではなく、周辺に所在する石室墳に多いことから社会階級の構造上の差異が認められる。

日本における装飾須恵器は、地域性が強く⁸⁹⁾、おそらくその源流は新羅との交流によるものであると思われるが、地域と地域の交流、そして渡来系集団が地元集団と融和されていくプロセスの中で捉えていかなければならないであろう。

有刺儀器は鉄鋌がもつ象徴的な概念の極大化された形であり、地域ごとに定着し、多様な型式へと変化していった。そして慶州、高霊の出土例に見られるように、時には祭祀儀礼の場で儀杖として使用されていた。有刺儀器による地域圏の設定は、新羅と加耶諸国における鉄生産の実態を直接に反映しているが、地域色の表れは、鉄生産を担っていた集団が地域ごとに異なることを示すと同時に、彼らの自己主張のシンボルとして有刺儀器が使われたことを意味する。

日本列島における5世紀代の祭祀遺構の中心的な供献品は、鉄製の武器・武具と農・工具、布帛類、鉄素材の鉄鋌、初期須恵器で構成されていたと考えられているが⁹⁰⁾、貴重な鉄素材である鉄鋌や最新の鍛冶技術と共に、鉄製儀器が導入されたことも十分考えられる。鉄製ミニチュア農工具は、韓半島の三国時代でも、加耶地域の一部と百済の錦江流域、そして全羅南道の栄山江流域に集中的にあらわれる特徴的な遺物である。

日本の古墳、祭祀遺跡からは鉄製ミニチュア農工具は出土しているが、これまでのところ、有刺儀器の出土事例はない。有刺儀器の材料である鉄鋌は日本の5世紀代の古墳を中心に出土し、中には奈良市・ウナナベ古墳陪塚の大和六号墳のように、大小の872枚もの鉄鋌が出土した古墳もあるが、鉄鋌を少し加工しただけの簡単な工作である有刺儀器は発見されていない。

沖ノ島21号では鉄鋌と実用の鉄器と共存するような形で、鉄製ミニチュア農工具が検出された。8号遺跡からも雛形鉄斧と雛形鉄刀がそれぞれ50点余り出土している。このような韓・日の両国における鉄製儀器の偏在的な分布状況からは、その地域性が見うけられ、技術の移動、さらに人の移住に伴う習俗や儀礼などの文化交流・受容の様相を伺い知ることができる。

韓半島における鉄生産と交易の実態に関しては、文献記録及び考古資料からもよく知られているが、特に新羅の場合は、交易を重視した外交戦略が後の統一の偉業に繋がってと言っても過言ではない。その交易の範囲は、遠く離れた西域まで広がっていたようで、『三国史記』をはじめ、韓国の文献史料、古墳の出土遺物、そして中世のアラブ文献の記述内容によって、新羅時代にアラブ・イスラム帝国をはじめとする西域から多様な文物が伝来し、両地域の間で交易は勿論のこと、人物の往来まであったことがすでに考証されている⁹¹⁾ (第20図)。

沖ノ島でも多数の新羅関連遺物が出土しているが、第二段階・岩陰祭祀の7号・8号遺跡の金製の四弁花指輪、金銅製歩揺付雲珠、鑄造鉄斧などは、慶州付近の新羅古墳に類品を求めることができる舶載品である。また8号出土のカットガラス碗の破片はササン朝ペルシアのものであり⁹²⁾、沖ノ島が「シルクロードの終着地」と呼ばれる契機にもなったが、慶州の皇南洞98号墳・155号墳(天馬塚)・金鈴塚などから出土している。

沖ノ島7号・8号遺跡の華々しい遺物は、新羅との交流の産物であるが、この時期は5世紀後半から6世紀前半代に比定されている。しかしその具体的な交渉を立証できる文献記録は殆ど見当たらず、新羅と手を結んで、大和政権に背いたという、継体天皇21・22年の筑紫国造磐井の乱に関する記事のみが交流史を探る糸口である。第二段階において宗像地域の在地豪族、胸肩君が沖ノ島祭祀に関与したことは、この地域の古墳のあり方からみても推測できるが⁹³⁾、宗像地域の海人集団を率いていた胸肩君が筑紫と朝鮮半島南部との航海に従事しながら、沖ノ島の女神に航海の安全や豊漁を祈る祭祀を行ったであろう⁹⁴⁾。

沖ノ島と共に古代の海上交通路を考える際に非常に重要な位置を占めている、扶安竹幕洞遺跡の第三段階



左 慶州・味鄒王陵地区鷄林路14号墳出土装飾宝剣(新羅5～6世紀、長さ36cm、宝物635号、国立慶州博物館(1995):『国立慶州博物館』)

右 慶州・掛陵のイラン系武人石像(権寧弼(1997):『シルクロード美術』悦話堂、P.165)

第20図:西域との交流を表す新羅の遺物

もまた5世紀後半から6世紀前半代の時期が考えられるが、この中心時期において、加羅による南朝朝貢の際に梁山江流域と加耶、倭(九州)による共同祭祀が行なわれたことが推測できる⁹⁵⁾。その背景には東アジアをめぐる交易の二元的な構造が窺われるが、九州の勢力は後の磐井の乱に象徴されるような畿内とは別の交易観を持っており、海人集団のネットワークを形成していたであろう。

補注

- 1) 金元龍(1922~1993) 大韓民国の考古美術史学者。
1971年、国立博物館の館長として武寧王陵の発掘の指揮を執った。
- 2) 弓場紀知(2005):「沖の島と韓国の西海岸、竹幕洞遺跡」;『古代祭祀とシルクロードの終着地・沖の島』シリーズ遺跡に学ぶ013 新泉社、p.84
- 3) ①祭祀遺物に関する研究論文
東潮(1985):「古代朝鮮の祭祀遺物に関する一考察ー異形土器をめぐるー」;『国立歴史民俗博物館研究報告』7
李殷昌(1987):「古墳に副葬された土器の一考察」;『三佛金元龍教授停年退任記念論叢』1ー考古学編
高東瑟(1980):「新羅土偶の類型と性格」;『慶熙史学』6・7・8合集
崔虎林(1988):「わが国の明器に関する一考察」;『韓國学論集』第14集
安順川(1997):「大伽耶園域の縮小模型鉄製農具研究」;釜山大学校史学科文学碩士学位論文
俞炳夏(1997):「扶安竹幕洞遺跡の海神と祭祀」;ソウル大学校文学碩士学位論文
金東淑(2000):「新羅・伽耶墳墓の祭祀遺構と遺物に関する研究」;慶北大学校考古人類学科文学碩士学位論文
徐始男・李賢珠(1997):「三韓・三国時代鉄器の儀器的性格に関する一考察」;『伽耶考古学論叢』2、駕洛国史蹟開発研究院
姜友邦(1993):「韓国古代の舍利供養具、地鎮具、鎮壇具」;『仏教芸術』209
殷和秀(1999):「韓国出土の卜骨に関する研究」;全北大学校修士学位論文
權五榮(1999):「韓国における古代の鳥観念と祭儀」;『歴史と現実』32
金斗喆(2000):「祭祀考古学の研究成果と課題」;『考古学の新しい志向』福泉博物館
李相吉(2000):「埴銅器時代の儀礼に関する考古学研究」;大邱暁星大学校博士学位論文
ジャンジェクン(2002):「馬形土器出土の祭祀遺跡」;『古代の馬ー神性と実用ー』国立済州博物館
崔恩娥(2004):「慶州地域出土の鎮壇具に関する研究」;東亜大学校修士学位論文
李陽洙(2004):「鳥霊信仰の流入と展開」;『靈魂の伝達者』国立金海博物館
林昭延(2006):「埴銅矛の儀器・祭器的性格」;『豊饒と安寧の祈願』福泉博物館
トンジンスク(2006):「古代の祭祀遺構と遺物」;『豊饒と安寧の祈願』福泉博物館
②論文集
国立全州博物館(1998):『扶安竹幕洞祭祀遺跡の研究』開館5周年記念学術シンポジウム論文集
漢陽大学校文化財研究所(2004):『先史と古代の儀礼考古学』富川古康洞先史遺跡国際学術会議資料集
国立金海博物館(2004):『靈魂の伝達者ー鳥・豊饒・崇拜ー』
福泉博物館特別展図録(2006):『豊饒と安寧の祈願ー先史・古代の祭祀』
4) 晋州南江ダム水没地区(報告書未刊)
5) 慶州王京(報告書未刊)でも三国時代の建物跡の下から地鎮具が発見された。
6) 金斗喆(2000):「祭祀考古学の研究成果と課題」;『考古学の新しい志向』福泉博物館
7) 国立晋州博物館(2003):『固城東外洞遺跡』遺跡調査報告書第16冊
8) 山衙玉山里遺跡(報告書未刊。玉山里遺跡発掘調査団『山衙玉山里遺跡発掘調査現場説明会資料集』1996)
9) 高麗大学校埋蔵文化財研究所(2004):『麻田里遺跡(C地区)』
10) 報告書未刊。(東洋大学校「安東国道5路線確定区間内安東亭田里遺跡現場説明会資料」2005)
11) 国立光州博物館(2003):『光州 新昌洞 低湿地 遺跡Ⅴ』
12) 嶺南文化財研究所(2002):『大邱 東川洞聚落遺跡』慶北大学校博物館(2000):『慶北大学校博物館遺跡発掘40年』開校54周年記念特別展図録
13) 嶺南文化財研究所(2001):『慶山 林堂洞遺跡Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』
14) 扶餘文化財研究所(1999):『宮南池』、扶餘文化財研究所(2001):『宮南池Ⅱ』
15) 大成洞古墳博物館(2006):『金海 舊官洞遺跡』
16) 釜山広域市立博物館福泉分館(1997):『釜山の先史遺跡と遺物』
17) 漢陽大学校博物館文化人類学科(2000):『富川古康洞先史遺跡第4次発掘調査報告書』;山頂部に溝で囲んだ積石と三国時代の祭祀土器が大量に確認
18) 国立扶餘博物館(2007):『扶餘論峙祭祀遺跡発掘調査報告書』
19) 漢陽大学校(1999):『二聖山城(第2次発掘調査報告書)』、漢陽大学校(1999):『二聖山城(第6次発掘調査報告書)』、漢陽大学校(1999):『二聖山城(第7次発掘調査報告書)』
20) 木浦大学校博物館(1996):『靈巖月出山祭祀遺跡』
21) 済州大学校博物館(1993):『済州市 龍潭洞遺跡』
22) 国立全州博物館(1994):『扶安竹幕洞祭祀遺跡』
23) 国立慶州文化財研究所(2004):『慶州 蓀谷洞・勿川里遺跡』
24) 国立尙州博物館(2004):『鎮川 石帳里 鉄生産遺跡』
25) 国立公州博物館(1999):『艇止山』;武寧王の殯殿と推定される建物跡と祭祀用の土器など大量に出土
26) 慶北大学校考古人類学科(1987):『陝川亭浦里D地区遺跡』;三国時代の石室の封土から大型土器と供献土器が出土
27) 啓明大学校博物館(1981):『高靈池山洞古墳群』;護石の周辺から祭祀に使用された土器の痕跡が検出。封土

- の中から馬の骨が発見
- 28) 慶南大学校博物館(2006):『馬山架浦洞場銅器埋納遺跡』
- 29) 慶南考古学研究所(2002):『陝川盈倉里無文時代集落』
- 30) 朴淳尧(1998):「竹幕洞遺跡出土土器の性格と年代に対して」;『扶安竹幕洞祭祀遺跡研究』開館五周年記念学術シンポジウム論文集、国立全州博物館
- 31) 朴天秀(1998):「総合討論要旨のコメント」;『扶安竹幕洞祭祀遺跡研究』開館五周年記念学術シンポジウム論文集 国立全州博物館
- 32) 林永珍(1998):「竹幕洞土器と榮山江流域土器の比較考察」;『扶安竹幕洞祭祀遺跡研究』開館五周年記念学術シンポジウム論文集 国立全州博物館
 朴天秀(2001):「榮山江流域の古墳」;『東アジアと日本の考古学—墓制①』 同成社
- 33) 高久健仁(2002):「韓国の倭系遺物」;『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』第五回歴博国際シンポジウム 国立歴史民俗博物館
- 34) 酒井清治(1990):「陶質土器と初期の須恵器」;『季刊考古学—古墳時代の日本と中国・朝鮮』第33号
 同上:「須恵器生産のはじまり」;『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』第五回歴博国際シンポジウム 国立歴史民俗博物館
- 35) 朴天秀 前掲論文集
- 36) 金吉植(1998):「扶安竹幕洞祭祀遺跡出土金属遺物の検討」;『扶安竹幕洞祭祀遺跡研究』開館五周年記念学術シンポジウム論文集 国立全州博物館
- 37) 国立全州博物館(1994):『扶安竹幕洞祭祀遺跡』
- 38) 梶山林繼(1998):「日本列島の祭祀遺跡からみた竹幕洞遺跡」;『扶安竹幕洞祭祀遺跡研究』開館五周年記念学術シンポジウム論文集、国立全州博物館前掲論文
- 39) 竹谷俊夫(1997):「韓国古代の祭祀—竹幕洞遺跡とその周辺」;『宗教と考古学』金関恕先生の古希をお祝する会
- 40) 寺沢知子(1986):「祭祀の変化と民衆」;『季刊考古学—古墳時代の社会と変革』第16号
- 41) 佐々木幹雄(1995):「韓国・竹幕洞祭祀遺跡を訪ねて」;『王朝の考古学』大川清博士古希記念論文集 雄山閣
 竹谷俊夫前掲論文
- 42) 佐々木幹雄 前掲論文
- 43) 竹谷俊夫 前掲論文
- 44) 李基東(1988):「馬韓領域での百済の成長」;『馬韓・百済文化』10、1987
 李賢恵(1994):「三韓の対外交易体系」;『李基白先生古稀記念韓国史学論叢』上
 金英心(1997):「百済の地方統治体制研究」;ソウル大学校博士学位論文
- 45) 姜鳳龍(1997):「百済の馬韓併呑に関する新考察」;『韓国上古史学報』26
- 46) 兪炳夏(1998):「扶安竹幕洞遺跡で行われた三国時代の海神祭祀」;『扶安竹幕洞祭祀遺跡研究』開館五周年記念学術シンポジウム論文集 国立全州博物館
- 47) 吉武孝礼・松尾宏(1992):「北部九州における渡来文化の様相」;『渡来文化の受容と展開』第四六回埋蔵文化財研究集会発表要旨
 柳沢一男(2000):「全南の榮山江型横穴石室と九州の横穴石室」;『第五回朝鮮学会大会発表要旨』
- 48) 酒井清治(1990):「陶質土器と初期の須恵器」;『季刊考古学—古墳時代の日本と中国・朝鮮』第33号
- 49) 白石太一郎(2002):「倭と加耶の交流の歴史的意味」;『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』第五回歴博国際シンポジウム 国立歴史民俗博物館
- 50) 東潮(2000):「倭と榮山江流域—百済・慕韓の領域、田中俊明(2000):「韓国の前方後円墳の被葬者・造墓集団に対する私見」;『第五回朝鮮学会大会発表要旨』
- 51) 沈奉謹(1981):『金海府院洞遺跡』古蹟調査報告書 4冊 東亜大学博物館
- 52) 国立中央博物館(1998):『東来樂民洞貝塚』
- 53) 大田広域市郷土史料館(1997):『大田地方の発掘遺跡』
- 54) 木浦大学博物館・靈巖郡(1996):『靈巖月出山祭祀遺跡』
- 55) 大田広域市郷土史料館(1997):『大田地方の発掘遺跡』
- 56) 壇国大学歴史学科(1997):『天安埋蔵文化財関連資料集』
 ソウル大学考古学調査団(1997):『天安慰禮山城一試掘及び発掘調査報告書』
- 57) 漢陽大学博物館(1987):『二聖山城—発掘中間報告書』
 同上(1991):『二聖山城—3次発掘調査報告書』
- 58) この名称は、日本の縄文時代の土偶と混乱を招く恐れがあるが、韓国では一般的に定着しているため、ここでは新羅の「土偶」と呼ぶことにする。
- 59) 朝鮮総督府(1932):『大正十三年度古墳調査報告』 慶州金鈴塚飾履塚発掘調査報告
- 60) 国立中央博物館、国立慶州博物館をはじめ、各私立大学校、そして日本の東京国立博物館に所蔵されている。
- 61) 小泉顕夫(1986):『朝鮮古代遺跡の編歴—発掘調査三十年の回想』 六興出版、p. 47—50
- 62) 国立慶州文化財研究所(2004):『慶州蔭谷洞・勿川里遺跡 慶州競馬場予定敷地A地区』
 キムホサン(2000):「慶州蔭谷洞・勿川里遺蹟調査概報」;『慶州文化』第六号 慶州文化院
- 63) 小泉顕夫(1969):「新羅の土偶」;『考古学ジャーナル』38、小泉顕夫(1986):『朝鮮古代遺跡の編歴—発掘調査三十年の回想』 六興出版
- 64) 浜田耕作(1927):「朝鮮の新羅焼」;『民族』2—3(『東亜考古学研究』1943年所収)
 小泉顕夫(1969):「新羅の土偶」;『考古学ジャーナル』38
- 65) 鄭澄元・申敬澈(1983):『東萊福泉洞古墳群』I
- 66) 東潮(1985):「古代朝鮮の祭祀遺物に関する一考察」;『国立歴史民俗博物館研究報告第7集』 国立歴史民俗博物館、p. 490
- 67) 李基白、李基東(1982):『韓国史講座』古代篇 一潮閣、

- p. 149
- 68) 李基東 上記の補注50)の文献 p. 151
- 69) 統一新羅時代の柏栗寺石幢記(高さ104cm、各面の幅29cm慶州博物館所蔵第)一面には、異次頓殉沔の場面と仏教公認の内容が刻まれている。元々慶州市の柏栗寺にあったが、1914年慶州博物館に所蔵された。『三国遺事』巻3 原宗興法厭觸滅身条によると、この碑の建立年代は817年(憲徳王9年)に推定される。
- 70) 徐始男・李賢珠(1997):「三韓・三国時代鉄器の儀器的性格に関する一考察」;『伽耶考古学論叢』2 駕洛国史蹟開発研究院、p. 155 →有刺儀器を儀器鉄矛の性格を継ぐ新たな形態の鉄器と把握し、有刺儀器の登場と非実用的な鉄矛を通じて推定できる嶺南地域の地域的な分化は同一のものであるとした。
- 71) 安順天(1997):「大伽耶圏域の縮小模型鉄製農工具研究」;釜山大学校史学科文学碩士学位論文、p. 159 →小形鉄製模造農耕具が高靈地域内ではⅠ～Ⅲ階級の古墳、周辺地域では大伽耶と密接な関係を持つ首長墓からのみ出土していることから、高靈での支配層と管理階層の統制、周辺地域との首長層との結束関係が推測できると指摘した。
- 72) 上野恵司(1997):「古墳と明器」;『季刊考古学』第59号、p. 75 →滑石の普及に伴い容易に模造品が造られる状況において、あくまで鉄にこだわった模造品が作られた点について、当時の鉄の供給問題と模造品を造るという新たな葬送・埋納儀礼の導入が考えられるとした。
- 73) 門田誠一(1993):「武器と農工具の語る精神世界」;『海でむすばれた人々』
- 74) 金東淑(2000):「新羅・伽耶墳墓の祭祀遺構と遺物に関する研究」;慶北大学校考古人類学科文学碩士学位論文、p. 25
- 75) 朝鮮時代後期の『擇思志』の記録によると「慶尚右道は農耕立地条件が非常に良好で、特に伽耶川流域の星州、高靈、陝川と智異山東側の晋州などは韓半島内でもっとも肥沃な土地であって、単位面積当たりの収穫量が一番多く、農業用水が豊富で、旱災にあわない」と記述されている。
- 76) 『三国志』魏志東夷伝弁辰条「国出鉄、韓 倭皆從取之、諸市買皆用鉄、如中国用錢、又以供給二郡」
- 77) 記事の中の国が辰弁韓のどの地域を指しているのかに関してはまだ議論の余地があるが、有刺儀器の出現から想定できる原三国時代における初期段階の鉄生産の中心は金海地域であると思われる。
- 78) 『三国史記』地理志、『三国遺事』五伽耶—『本朝史略』
- 79) 李永植(1996):「伽耶と鉄」;『市民のための伽耶史』、釜山・慶南歴史研究所編、p. 65
- 80) 李賢恵(1995):「鉄器普及と政治権力の成長」;『伽耶諸国の鉄』、仁済大学校伽耶文化研究所編、p. 19
- 81) 李賢恵 前掲載論文 p. 22
- 82) 大伽耶の表記は『三国史記』地理志、『三国遺事』五伽耶—『駕洛国記』に見られ、現在の慶尚北道高靈がその比定地である。
- 83) 李炯基(2000):「大伽耶の聯盟構造に関する試論」;『韓国古代史研究』18、p. 22
- 84) 『日本書紀』神功紀49年(多羅の表記は『梁職貢図』百濟使でも見られる)
- 85) 李熙濬(1995):「土器からみた大伽耶の圏域とその変遷」;『伽耶史研究』
- 86) また4～6世紀前半にかけて多くの遺構から玉が出土しており、鉄器・玉を生産する工人集団の存在の可能性は極めて高い。
- 87) 金泰坤(1983):『韓国の民間信仰研究』 集文堂
- 88) 大場磐雄編(1983):『神道考古学講座第3巻—原始神道期二』 雄山閣
亀井正道(1971):「祭祀遺物—模造品の変遷—」;竹内理三編『古代の日本2』 角川書店
- 89) 間壁菫子「装飾須恵器の小像群」1988、『倉敷考古館研究集報第20号』 →日本の場合は主体が犬、鹿、猪、馬、鳥であるが、出土数の多い岡山・兵庫・大阪・和歌山では人物像との組み合わせの例が多い。
- 90) 笹生衛(2010):「古墳時代における祭具の再検討—千束台遺跡祭祀遺構の分析と鉄製品の評価を中心に—」;『國學院大学伝統文化リサーチセンター研究紀要』第2号、p. 91
- 91) ムハマド カンス(1992):『新羅・西域交流史』 檀国大学校出版部
権寧弼(1997):『シルクロード美術』 悦話堂
鄭守一(2002):『文明交流史研究』 四季節出版社
- 92) 弓場紀知氏は新羅の古墳から出土したほとんどがローマングラスであることを指摘し、ササン・ペルシア系ガラスはローマングラスより一世紀後の五、六世紀のものであり、その伝来経緯が異なるとした。
- 93) 原俊一(1988):「古墳時代の宗像」;『古代を考える—沖ノ島と古代祭祀』 吉川弘文館
- 94) 和田萃(1988):「沖ノ島と大和王権」;『古代を考える—沖ノ島と古代の祭祀』 吉川弘文館、p. 187
- 95) 高慶秀(2003):「三国時代の海洋祭祀に関する一考察—扶安竹幕洞祭祀遺跡を中心に—」;『考古学シリーズⅧ:考古学に学ぶ(Ⅱ)』 同志社大学、p. 855～865
同上(2008):「韓国扶安竹幕洞祭祀遺跡の文化複合—海辺と航海の祭祀—」;『古代日本の異文化交流』 勉誠出版、p. 108～127

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅰ

平成 23 年 3 月 31 日

発 行 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
(福岡県・宗像市・福津市)

福岡県企画・地域振興部総合政策課世界遺産登録推進室
〒812-8577
福岡県福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印 刷 株式会社プレック研究所
〒102-0083
東京都千代田区麹町 3 丁目 7 番地 6